

正しい批判はいかにあるべきか(十一)

——教条主義批判を装った修正主義——

山 本 二 三 丸

まえがき

第一節 予備的注意

第二節 榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判(その一) …… (以上、本誌第二十一卷第一号所載)

第三節 榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判(その二) …… (以上、本誌第二十一卷第二号所載)

第四節 榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判(その三) …… (以上、本誌第二十一卷第三号所載)

第五節 榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判(その四) …… (以上、本誌第二十一卷第四号所載)

第六節 榊氏による修正主義批判(その一) …… (以上、本誌第二十二卷第一号所載)

第七節 榊氏による修正主義批判(その二) …… (以上、本誌第二十二卷第三号所載)

第八節 榊氏による修正主義批判(その三) …… (以上、本誌第二十二卷第四号所載)

第九節 榊氏による修正主義批判(その四) …… (以上、本誌第二十三卷第一号所載)

第十節 榊氏による修正主義批判(その五) …… (以上、本誌第二十三卷第二号所載)

第十一節 榊氏の「教条主義批判」の客観的意義(その一) …… (以上、本誌第二十三卷第三号所載)

第十二節 榊氏の「教条主義批判」の客観的意義(その二) …… (以上、本号所載)

第十三節 榊氏の「教条主義批判」の客観的意義(その三)

むすび

正しい批判はいかにあるべきか

第十二節 榊氏の教条主義批判の客観的意義（その二）

一

一九六六年十一月末から十二月末にかけて文化大革命にわきかえる中国を訪問した日中友好協会（正統）第四次学習活動家代表団は、十二月七日、中日友好協会秘書長趙安博氏と会見して、日中両党会談についての見解を聴く機会をもった。この趙安博氏の談話の全内容は、一九六七年一月発表された同代表団の報告書『文化大革命下の中国』（日中友好協会（正統）本部発行）のなかに、『中国共産党と日本共産党との意見の違いについて』と題されて採録されているが、さらに、その談話のうちとくに日中両党会談に直接関係した部分だけは、中国研究所「アジア経済旬報」（一九六七年三月中旬号）に、趙安博『日共修正主義指導部の謬論を駁す——中日両党会談をめぐる我々の見解』と題して掲載されている。日中両党会談にかんする部分は、右報告書と「アジア経済旬報」とでは全くちがいはないが、ただ、日本側で便宜つけた区切りと小見出しがかなりちがっており、後者の方がよりこまかく小見出しがつけられている。そこで、本稿では、後者に拠って、趙氏の談話の内容をうかがうことにしたいとおもう。ただし、この談話内容は、いずれの箇所をとってもきわめて重要な意味をもっているものばかりであるので、当初企画した抜粋をやめ、これをそのまま引用してかかけることにしたもので、この点読者諸賢の御諒解をえたい。

（１）本代表団は、岩村三千夫氏を団長とし、七名の団員をもって構成されていた。趙安博氏の談話は、団員の垂永英彦、大林洋五両氏によってノットされたが、両氏は報告書のなかで、「趙氏は微妙な表現は日本語の俗語を入れてユーモアたっぷりに話をした。記録の中で片仮名で書きこまれているのは趙氏が日本語を使った箇所である」と注記されている。本論稿に引

用するについては、岩村、大林両氏の快諾をえたことをここに付記しておきたい。なお、小見出しは、日本側で便宜上つけたものであるため、引用にさいしては括弧内に入れることにしたものである。

『日共修正主義指導部の謬論を駁す——中日両党会談をめぐる我々の見解』——趙安博

「(大国主義とおしつけに反対してきた中共)

中国は大国主義にもっとも反対し、他人へのおしつけに反対しております。なぜなら、我々はフルシチョフ現代修正主義者の大国主義の被害者だからです。フルシチョフは我々に何回も自分の路線をおしつけようとしました。我々は兄弟党間独立自主でなければならぬと考えます。親の党と子の党というやり方に反対します。我々は過去なが年のあいだ日本の党を尊重してきました。違った意見があっても差支えないと考えていました。毛主席は宮本代表团と会見の際に申しました。『我々はあなた方へおしつけません。あなた方も我々へおしつけなくて下さい』と。

(毛主席、修正主義反対で三点を指摘)

共同コミュニケについては、我々はつぎのような主張をしました。第一に、名指しでソ連修正主義を攻撃すべきだ、ということ。名指しでなければ、修正主義にもさまざまな色あいがあるのですから、誰のことかわかりません。第二に、反米統一戦線について、我々は最も広汎な、狭くない、というのは、第一、第二中間地帯をもふくむ、そして最も真実の、つまり偽りでない、全世界の絶対多数の人民の願望を反映した、反米統一戦線でなければならぬ、ということ。第三に修正主義反対は、外国の修正主義のみでなく、自国の修正主義、自党内の修正主義への反対でもなければならぬ、ということ。我々は教条主義反対ということに賛成です。しかし、それには説明を必要とします。現在、ソ連の指導者たちのいう『教条主義』とは真のマルクス・レーニン主義のことだからです。毛主席はこの三点をのべました。もし宮本代表团が本当の帝国主義反対、修正主義反対の革命の党ならば、これを受容れたにちがいないとおもいます。しかし、宮本先生は、『我々は平和をいいたかったので、革命をいいにきたのではない。平和のための代表团だ』と申されました。そこで共同コミュニケはまとまりませんでした。結構です。その方がお互いに精神的負担がなくてすみます。もし間違ったコミュニケを出していたら、我々は日本の革命に責任を感じなければならなかったでしょうから。

(弾圧への精神的備えは必要)

正しい批判はいかにあるべきか

宮本代表団はベトナム、朝鮮の党と共同コミニケを發表しました。そこで中国側から共同コミニケを出そうと提案しました。共同コミニケを出したほうが、代表団が帰国してからの報告活動に都合よからうと思つたからです。代表団はすぐそれに応じてきました。宮本代表団が朝鮮から中国へ戻ってきたとき、ソ連共産党二三回大会には出席しないことを表明しました。當時我々は、これに高い評価をしました。草案は宮本代表団が起草しました。そして我々のほうは毛主席のところでも最終的に決めることをあらかじめ言っておきました。毛主席と会見の際、毛主席が修正意見を出し、それを宮本氏は受容せず、お流れになりました。別に大したことはありません。なぜ帰つてからデマを飛ばすのでしょうか。党内の報告会でいろんなことを言ったり、週刊誌にそれが出たりしているそうですな。聞くとところによると、彼等は、我々が『直ちに武装闘争をやれ』といったからまとまらなかつたとか。そんなベラボウな。我々がそんなことをいうわけがない。我々がいったのは、アメリカ帝國主義の戦争拡大にたいして備えが必要だ、ということですよ。アメリカは北爆をさらに進めて戦火を中国へまで拡大する可能性がある。アメリカ帝國主義が中国を侵略すると、我々の北の奴（ソ連修正主義者のこと——注）やインド反動派も呼応して侵略するだろう。インド反動派はたいして力がないから、基本的には、米ソで中国を二分しようとするだろう。この場合、アメリカ帝國主義が日本軍國主義を復活させ、海外派兵をやらせる可能性は大きい。日本政府が極反動化する場合には、朝鮮戦争の時の経験からみても、まず国内民主勢力への攻撃をやるであろう。これに対する精神的備えが必要である、といったのです。

（宮本書記長、『弾圧する政府は民主主義國では崩壊する』と反論）

これに宮本氏は反感をいだいたようです。『日本は民主主義が發達した國である。そんな弾圧をすれば政府が崩壊する。佐藤はヨーヤラン、悪い可能性があらわれるまえに、よい可能性を追求する。日共は社会党、公明党とも統一戦線をつくつた、小選挙区制反対の統一戦線を』というのです。日本の国内情勢の評価は、まるで自民党や社会党と全く同じではないですか。廖承志同志が先日ドイツ共産党についてのべたように、^{（注）}非常に危険であり、大きな損害をもたらすおそれがあります。

（注）廖承志中日友好協会会長（中共中央委員）は十二月二日夜、我代表団を北京（場所名略——山本）で招宴した際、次のように語つた。『私は若い時ドイツに留学したことがある。当時、コミンテルンの規定で一国共産主義であつたので、我々中国人もドイツにいる間はドイツ共産党に属して活動した。當時はナチスが抬頭しつゝあつた時期であつた。私はドイツ共産党がナチスの抬頭にたいして、何等の精神的準備もできていないのを感じて、ドイツ共産党の指導者の一人に、その意見をのべた。すると、彼は「ドイツは民主主義が非常に發達している。もっとも民主的なワイマール憲法がある。ドイツ共産党は

資本主義世界最大の共産党である。そうやすやすとはやられない。反動派がもし攻撃をしかけてくるならば、我々は社会民主党やブルジョア民主政党とも協力して彼等を倒すことができる……云々」といいました。しかしその後のドイツはどうなったでしょうか。ナチスが政権をにぎるや、たちまち事件をでっちあげて共産党を潰し、ついで憲法など全く無視して社会民主党も、他のブルジョア政党も潰してしまいました。その結果は、ドイツの革命に損害を与えたのみでなく、世界に被害をもたらすことになりました」。

(日共路線は新型修正主義)

彼等は立場がかわってしまっているのです。日本の革命を考えず、平和的移行の考え方になってしまっているのです。八回大会で定められた綱領、九回大会の諸決議にはそれがあらわれています。『国会で安定した過半数をしめることができるならば、国会を人民に奉仕する道具にかえ、革命の条件をさらに有利にすることができるといっています。』『議会で多数をとれば、革命……』と直接にはいっていない。これが古い修正主義者たちがう点ですな。『革命に有利な条件』といっている。また革命政権といわず、『民族民主連合政府』といっています。我々の親愛なる『友人』岡正芳先生は、また新しい發明をなさいました。一〇回大会の演説で『我々の路線は……武装蜂起でも平和移行でもない……マルクス・レーニン主義への創造的寄与……』だそうです。こういう革命方式がいったいあるでしょうか。武装蜂起と平和的移行の論争は一〇〇年来のもです。平和的移行の例は過去にはありませんでした。現在もありません。ソ連共産党二〇回大会におけるフルシチョフの報告の悪い影響は、ここにもあらわれています。もつとも、もつとも、もつとも、この根源があつたのでしょうが。

(ベトナム戦争についての我々の意見——袴田先生の発言はソ連修正主義者と同じ発想——)

十一月二十九日のアカハタには袴田先生が、反動的な『日本アジア・アフリカ連帯委員会』でした演説というのが掲載されています。これにたいする私の意見を述べてみたいと思います。ベトナム戦争の問題です。

第一に、北ベトナムへの爆撃の目をいい、南ベトナムへの侵略をいいません。すくなくとも強調しません。これはソ連修正主義者と同じ発想法です。ベトナム南北を分離した考え方です。北爆やらばね話合いは可能だ、という態度です。これはアメリカが南ベトナムへ居坐るのを許すことになります。ベトナムは一つのまとまった国です。アメリカの南ベトナムへの侵略が根本問題です。北爆は、アメリカがベトナム人民に『平和会議』につかせるための恐喝の手段になっております。我々は弱みをみせるわけにはゆきません。我々は、爆撃をするならするがよい。しかし、我々はアメリカ帝国主義の軍隊を一人残らず追放するまで

頑張る、という立場です。

第二に、ソ連がベトナムを援助しているとのみ言つて、ソ連の援助が真物か偽物かをいいません。『フルシチョフは良くなかつたが、今の指導部はフルシチョフの路線よりましだ。ベトナムを援助するから』といひます。しかし、ソ連のベトナムへの援助の意図は、果してベトナムを支援するためのものでしょうか？ それともベトナムを従属させ、ベトナム問題に発言権を得て、アメリカとの協議の手段にし、ベトナム人民の闘争を売渡そうとするものでしょうか？ 援助は偽りであり、裏切りが真の姿です。米ソ協調による世界支配という考え方を改めてはおりません。中国とベトナムとの間を挑発し、離間する手段にしようとしています。たとえばマリノフスキー国防相はハンガリーにおいて、『中国がソ連のベトナムへの援助物資の輸送を拒否している。サボっている。』といひました。とてもない中傷です。中国は無料で迅速に輸送しています。満州里と友誼関の間は、もともと十日間かかります。今、我々は優先的に運んで、十日間はかかりません。一週間か、そこらで運んでおります。

代々木はこう質問します。『ソ連の援助が偽りだというならば、なぜ中国はその輸送を手伝うのか』と。我々の見解は、ソ連の援助は少なすぎる、もっともっと増やせ、ということとです。ソ連の援助が多かろうと少なかろうと、それが偽りであることにかわりはありません。しかしベトナムが要求しているかぎり、運ぶのは間違ひではありません。我々のいう偽りというのは、砲弾が偽物だ、紙でできている、というような意味での偽物というのではありません。援助の目的が偽りだということです。例えば、日本にはアメリカの軍事基地があります。そしてアメリカ人は、時々クリスマスなどの、日本の友人たちを招待して、キャンデーやコココーラを御馳走します。そのキャンデーやコココーラは本物でしょう。しかしその友好は偽りです。ソ連のベトナムへの援助のみを言つて、その援助の性質——真偽をいわず、米ソ協調による世界支配の意図を暴露しない日共のい方は、ソ連修正主義を美化するものです。

(二面政策をとる代々木)

代々木も二面政策をとつています。この論文も前半は、ソ連修正主義を少々暴露して、『ソ連指導部はアメリカ帝国主義との闘争を回避している……』といひています。そして『シカシナガラ……ケレドモ』として『ソ連のベトナムへの援助は一定の意義』があり、『やはり反米』だといひています。この論文は実際には『シカシナガラ……ケレドモ……』以下が主な論調です。ソ連修正主義の援助が偽りであることを暴露せず、美化する役割を果しています。ソ連現指導部は二面政策だといひますが、連米と反米の重点はどちらにあるか、それをいいません。だからソ連修正主義の美化です。

(誤った日共の「統一戦線」観)

代々木はまたこういいます。『中共は国民党とも統一戦線を組んだではないか、我々がソ連との共同行動を組むのはなぜ悪いか?』と。これは異なった事柄を同一視しています。蔣介石は当時は日帝との対立に重点がありました。もちろん彼は反共・反人民ではありましたが、日本帝国主義の軍隊は中国本土に入っておりませんでした。近衛声明は『蔣介石を相手とせず』といっておりました。蔣介石の存在がおびやかされており、抵抗せざるをえなかったのです。ここに統一戦線の基礎がありました。ソ連修正主義は、アメリカとの協調による世界支配が主目的です。ソ連指導部は、アメリカにしばしば降伏のための大活躍をしてみました。マニラ、モスクワ、ニューデリーの会談、グロムイコ・ジョンソン会談、ウイルソンの訪ソ、カナダ外相の訪ソ、等々。一方ではベトナムへの軍隊の増派、他方では『東西緊張緩和』という一連の危険の動きについて、『赤旗』は何をいっていますか? グロムイコ・ジョンソン会談で、ベトナムでのクリスマス作戦について、ジョンソンは『昨年は休戦期間中にベトナムは補給作業をやったが、今年はそんなまねは許さないぞ』とグロムイコの服のボタンを押えていい、グロムイコはそれに対してニコニコ笑っていたそうです。

ソ連とアメリカは航空協定も結びました。十一月七日にはジョンソンは対ヨーロッパ政策で報告をしましたが、その中で彼は『ソ連と東欧諸国には改革の気風がある』とのべております。米国とハンガリー、米国とブルガリアとの間では、それぞれ公使館を大使館に格上げするそうです。核拡散防止協定も近く調印されることでしょう。米国とソ連および東欧諸国との結びつきは、ますます緊密になっています。梶田氏はこのことを暴露しません。ソ連の現指導部はフルシチョフより悪いのです。フルシチョフより先へつつ走っています。

今のソ連政府は、佐藤政府とも結託しています。パイプライン、シベリアの銅鉱開発、カラフトの天然ガス——二〇億立方メートルの埋蔵だそうですが——を土産に佐藤に近づいています。グロムイコは『日本はアジアにおける安定した勢力である』といっています。実際上は『日米安保条約』を承認しているのです。ソ連と日本との関係改善は日本と第三国——つまりアメリカ——との友好関係に影響を与えない、と保証しています。

第三に、『アメリカ帝国主義は国際共産主義運動の不団結を利用して』とのみ語って、誰がその不団結の責任者かをいいません。ベトナムへのアメリカ帝国主義の侵略は帝国主義の本性であり、国際共産主義運動が不団結だからおこったものではありません。我々が団結していようとまいと、彼等は侵略するものなのです。朝鮮戦争の例がそれを示しています。当時は国際共

産主義運動は團結しておりました。もちろん團結していたほうがよいにきまっています。しかし團結を回復するためには、不團結の責任者を徹底的に批判することから始めねばなりません。我々の見解では、責任は全部ソ連現代修正主義者にあります。

(日共、中ベトナム人民の離間を挑発、中国人民はベトナム人民に感謝)

第四に、中国とベトナムとの關係を挑発しようとしています。日共は一〇回大会の報告で、中国は中米戦争のみを考えている、中国の考えは、中米戦争必至論だといっています。これは悪とい中傷です。中国は民族利己主義だといわんとしているのです。中国はベトナム人民の反米闘争への援助をせず、ベトナム人民を犠牲にしていると印象づけようとしています。代々木のみが本当にベトナム人民のを考えている……と。我々の援助は精神的にも、物質的にも彼等(ソ連)よりずっと多いのです。アメリカはそれをよく知っています。ソ連の援助はベトナム北部に対するものだけで、南部の闘争へは援助していません。中国は北にも南へも援助しています。衣類、食品、器具、すべての種類の武器、薬品を援助しています。ベトナム南部で闘っている人民にとつて危険なマラリアの特効薬も作って送っています。ベトナム南部のマラリアは強烈で、他の薬では効かなくなっているのです。ベトナム人民の物質的支援は、中国は国が広いので、広東、広西、福建など中南地区の数省を動員すれば十分足りります。北京ではスローガンは少なくても、人民全体が自分たちの生産がベトナム人民への支援になることを自覚して積極的に労働しております。人民を動員してカンパを集める必要はありません。政府の財政によつて援助物資をまかなうことができます。援助のことなど騒ぐ必要はありません。至極当然のことです。もし感謝というなら、ベトナムが中国にたいしてでなく、中国人民がベトナム人民に感謝すべきです。なぜなら、彼等ベトナム人民こそ最前線で戦っているのですから。また援助の内容をくどくど発表しないのは、事が軍事機密に属するからでもあります。ソ連のやり方とは我々は反対です。ソ連は援助はすくないのに、ほらが大きいのです。ベトナムのことはベトナム人民自身が決定すべきものです。我々も意見があれば発表します。アメリカ帝国主義との闘争については、我々の経験は豊富です。この経験を彼等に話してあげます。どれをとるか彼等自身の問題です。

(追いこまれているのはアメリカ)

代々木は、ベトナム人民は苦しい境遇にある、といっています。しかし事實は、アメリカ帝国主義が困難にぶつかっているのです。ベトナム人民の側が大勝利をおさめ、サイゴンの内部まで解放戦線の力がおよんでいます。ベトナム人民の力は、ますます強大になってきています。しかし、いますぐアメリカをおい出すことは不可能です。闘争の中でアメリカ帝国主義の力を弱めてゆかねばなりません。アメリカ政府は毎日二億ドルの軍事費を使い、アメリカの物価騰貴は主婦たちの不満をひきおこしてい

ます。反戦運動、黒人闘争も高まっています。アメリカ政府はベトナムへ四〇万の軍隊を派遣していますが、それを八〇万、一〇〇万に増兵したところで勝利をうることはできません。この戦争はよいものを引出しました。ベトナム人民の団結を強固なものにしたからです。われわれは最大の民族的犠牲をはらう用意があると声明しております。われわれは各方面で準備し、アメリカ帝国主義の戦争拡大に備えています。われわれは侵略戦争に反対します。しかし戦争を恐れません。たとえ彼等が原爆を落して人民大会堂をこわしても、われわれはもっと立派な人民大会堂をつくります。紅衛兵も文化大革命も抗米のための準備ともいえます。勝利のためには犠牲をおそれてはなりません。おそれては断固とした闘いができなくなります。われわれの固い決心は、ベトナム人民、全世界人民にとって励ましとなります。

(最悪の事態に備えないようでは革命家失格)

中米戦争は可能性の問題です。アメリカがヨーロッパ、ヤラスカは我々が決めるわけではありません。しかし我々の側は備えをしなければなりません。『マサカ、ソナコトハシナイダロウ』などと考えてたかをくくっているわけにはいきません。もしそんな心理だったら事がおこった時には負けです。毛主席も『最悪の事態に備えよ』と教えています。一九四五年に毛沢東主席が蔣介石と会談した際にも、最悪の事態に備えて準備しました。あの時に、『蔣介石ハ、マサカソナコト……』と思っていたら、第三次国内革命戦争の勝利はおぼつかなかったでしょう。もしそうだったら毛沢東でなく陳独秀になっていたことでしょう。最悪の事態に備える、これが真の自力更生の道です。

(袴田氏たちは人民の力より最新兵器を重視、モスクワとの共同闘争論は日共指導部のかたおもい)

袴田氏はベトナム人民、中国人民をみくびっています。袴田氏たちの眼には新式兵器しかありません。アメリカ帝国主義の飛行機やらさまざまな兵器やらに対抗するには新式兵器しかない、これはモスクワしか持っていない、だからモスクワとの共同闘争は不可欠だ、というのです。しかしこれは『カタオモイ』ですね。一九五三年までの、つまりスターリン在世当時ならば、共同闘争は可能でした。しかし今は、ソ連の体制はかわっているのです。フルシチョフ登場以後、資本主義を復活させようとしています。未解放の国での帝国主義の支配維持を認めています。いくら共同闘争をよびかけても、米ソ協調・佐藤との協力を捨てません。ソ連の現指導部は、日本の社会民主主義者の右派、総評右派との連合や、志賀一派への支持を捨てざることは不可能です。支持をいくらか控えめにすることはありうるでしょう。志賀と代々木の仲を取持つためにそうすることはありうるでしょう。志賀の新党結成については、バックが変わって踏みきれずにいるようです。共同行動をとなくても、ソ連共産党指導部は、

正しい批判はいかにあるべきか

二〇、二二、二二回大会の綱領や決議を捨てることができでしようか、⁽²⁾全く非現実的です。ソ連との共同行動をよびかけるのは、人民を偽瞞するにすぎません。われわれもこれまで度々暴露したように、ソ連現指導部はアメリカ帝国主義と結びついています。ソ連との共同行動を呼びかけるのは、世界各国人民にソ連修正主義指導部に幻想をいだかせることになります。もしも、われわれがソ連との共同闘争は可能だといったら、その翌日にでも修正主義指導部はアメリカに降伏しに行くことでしょう。『赤旗』は、もしソ連指導部が裏切ったら、その時こそ反ソの大暴露をやればよいといえます。しかし、その時はもうおそいのです。何百万もの人の首が飛んだ後です。こういう議論は、戦争や革命を見たことのないものだけにできる議論です。戦争をおそれるものは、結局は修正主義の道へ行ってしまう。

さっき蔣介石の例をひきました。ソ連修正主義者は往年の蔣介石より悪いのです。往年の汪精衛のようなものです。汪精衛と連合して反日ができなかったと同様に、皆さんが佐藤と連合して反米闘争ができないのと同様に、ソ連修正主義と連合しては反米はできません。

(代々木、ツインメルワールド会議の本質を歪曲)

代々木は、レーニンがツインメルワールド会議を開いたことを例にとります。さも第二インターの歴史にくわしそうに。しかし、レーニンは第二インターの右派と会議をもったものではありません。中間派であったカウツキー派と会議をもったのです。このカウツキー派も、のちに一九一七年には右派に走りましたが、レーニンがツインメルワールド会議を開いたことの主たる目的は、第二インターと決裂し、第三インターを結成するきっかけをつくつたことに意義があります。例にあげたもの自体が、『共同行動』のスローガンを裏付けするものではなく、失敗を意味するものです。我々のツインメルワールド会議は、一九五七年と六〇年のモスクワにおける各国共産党労働者党代表者会議であつたといえます。当時、われわれは、彼等との団結のために努力しました。しかし、フルシチョフは署名後二四時間もたたないうちに声明を裏切りました。ソ連修正主義者は一九六五年三月に分裂会議を開き、最近のヨーロッパ諸国の共産党大会、ブルガリアやハンガリーなどで、中国への攻撃をやっています。裏切者、ドラカンへは、原則しかいえません。柔軟性は不要です。柔軟性をいすぎると、原則性を失います。結局自分も相手と一緒にたつてしまします。カウツキーも結局は右派へ走りしました。代々木も結局そうなることでしょう。

(『赤旗』、基礎なき連合をとる、反人民の日共修正主義は必らず失敗)

第五に、『赤旗』はしきりと連合をとるしていますが、連合の基礎は何でしょう。基礎のない連合はありません。⁽³⁾ソ連修正

主義者はマルクス・レーニン主義を裏切ったのですから、彼等との連合は共通の基礎なき連合となります。大衆団体は思想や信条のちがいをこえた団体です。しかし彼等はそこへ、団体の共通の基礎とはがった思想をもちこみ、破壊をやるなら、それはただの思想のちがいではありません。それゆえ、アメリカ帝国主義に反対しようとするれば、必ずソ連修正主義に反対しなければなりません。もし中国に反対するようになるなら、それは必ずアメリカ帝国主義と連合するようになるでしょう。今日、ソ連指導部は、アメリカ帝国主義と連合し、日本やインドの反動派と連合し、チトー一派と連合して、反中国の大包囲陣をつくらうとしています。もしも代々木がこれ加わろうというならば、それは結構です。しかし、その時には、アメリカ帝国主義反対、反動勢力反対、修正主義反対は、みな偽りになります。『独立自主』も無駄口になります。ソ連指導部との共同行動はできない、ということが独自の判断でどうして出てこないのでしょうか。ソ連指導部と共同行動できるといえば独立自主で、できないといえは事大主義だ、とは誰が決めたのでしょうか。代々木の考え方は、日本人の利益から出発しておらず、日本の党员たちと人民を偽瞞するものです。彼等はずなならず失敗するでしょう」(傍点―山本)。

(2) この指摘は、そのまま「日共指導層」にあてはまる。つまり、「日共指導層」は「七中総決議」や第八回大会の「日共綱領」を捨てさることができるだろうか、と。教祖フルシチョフの「二〇回大会報告」に随喜の涙を流して急遽「一八〇度転換」をやったのけ、「報告」そのままの修正主義綱領をつくりあげこれを守り本尊としている盲従分子が、その唯一無二の守り本尊を手放すことが、どうしてできようか？

(3) この言葉は、もちろん、教祖への「べったり尻つき」の俗物的修正主義者どもも「日共指導層」には通じようもない。なぜというに、彼等にとっては、連合の「基礎」は、いつでも「彼等自身の権勢保持と地位確保」でしかなく、マルクス・レーニン主義者として当然の「基礎」、すなわち、「マルクス・レーニン主義の革命的基本的原則と世界の革命的人民的利益」は、とうの昔に忘れはてているからである。

二

そこで、すでに前節で述べたところと多少の重複を免れないが、なお念のため、さきの「赤旗」論説と右の趙安博正しい批判はいかにあるべきか

氏談話とをつきあわせることによって、若干の重要な結論をひきだしてみることになろう。

第一、まず事実経過は、つぎのとおりである。

(1) 共同コミニケを出すことは中共側から提案され、日共代表団がただちにこれに応じた。

(2) 草案は、日共代表団がその起草にあたった。

(3) 草案の内容は、三月上旬の日中両党会談で一致をみたものにかぎられ、不一致点にはふれない。右両党会談で中共側代表団を「主宰」したのは、「中国のフルシチョフ」劉少奇党副主席とこれにつながる鄧小平党書記長、彭真政治局委員などである。

(4) コミニケ草案は、毛沢東主席のところで「最終的に決定される」ことになっていた。

(5) 毛主席は、草案にたいして、三点につき修正意見を出した。——一、名ざしでソ連共産党指導部を修正主義党として攻撃すること、二、反米統一戦線にはソ連修正主義はいれるべきでないこと、三、修正主義との闘争は、自国内、自党内においても真剣かつ徹底的であるべきこと。

(6) 日共代表団は、右の修正意見を拒否し、したがって共同コミニケは成立するにいたらないで、会見は終わった。

第二、論争点は、つぎの二つ、すなわち、一、名ざしでソ連修正主義指導部を非難・攻撃するかしないか、二、反米ベトナム支援統一戦線にソ連修正主義指導部を参加させるかさせないか、にしばられる。そしてこの根本問題にたいする答えは、ソ連共産党指導部にたいする態度によって、すなわちマルクス・レーニン主義の革命的基本的原則を堅持するか、それとも修正主義と「妥協」するかによって、おのずからきまるのである。

第三、ところが、この肝腎の論争点をば「赤旗」論説は故意にはぐらかし、「手続き」の問題をもちだして、つぎ

のような毛主席論難の「地盤づくり」をすすめる。

(1) 教祖にもっとも忠実な「日共指導層」は、教祖の口を真似て、「わが党は、左右の日和見主義、修正主義、教条主義とたたかってきた」などという、たい文句を並べるのがお得意だが、それというのも、こうした漠然とした「修正主義攻撃」というやり方が、骨の髄からの俗物的修正主義者というかれら自身の本性をまんまとくらましてしまう絶好の手だということをよく知っているからである。それゆえ、「名ざしの非難」をしなければならなくなつて右の手がだめになるとすれば、まさに一大事である。この手を残しておくために考えだされたのが、つぎのような「原則論」である。——「ソ連共産党指導部についての名ざしの非難をふくめるとすれば、それはどうしても、今日の情勢のもとでのソ連共産党指導部の評価についての両党間の意見の相違にふれざるをえなくなる。しかし、それは、共同コミニケ作成にあたつて確認しあつた不一致点にはふれず一致点だけを書くという原則にもとることになる」。つまり、「日共指導層」は、マルクス・レーニン主義の革命的基本的原則をいかに守つて現代修正主義者と徹底的にたたかうかということが全くその眼中になく、それにかわつて、ただ「不一致点にはふれずに一致点だけを書いてすまず」ことだけが重大な意義をもつ「原則」になつてゐるというほどに、「修正主義的進化」をとげたものとなつてゐるのである。

(4) この、「今日の情勢のもとでの……評価」という、小細工的文字に注意されたい。つまり、俗物にとつては、「情勢」の移り変りによつて修正主義にたいする闘争の仕方が移り変り、その非難・攻撃から融和・提携へとかわるのはごく当然だ、というわけである。

(2) 統一戦線結成の問題については、「赤旗」論説は、「アメリカ帝国主義のベトナム侵略の兇暴化に直面し、国際的な反帝闘争の圧力のもとで二面的態度をとらざるをえなくなつたソ連共産党指導部にたいして、可能な(19)反帝統一行動のための努力をおこないつつ、その誤りを批判するという革命的(19)二面政策をもつて対処するか、それともこれをアメリカ帝国主義と同列の

正しい批判はいかにあるべきか

敵とみる反米反ソ統一戦線という立場をとるかの対立であった」として、「両党間にこの不一致があることをたがいに承認しつつ、一致点での共同行動を強化するという精神にもとづいて共同コミニケがつくられていたのにたいし、最終段階での毛沢東同志の『鋭い批判』なるものは、両党間に原則的な意見の相違のある問題について、中国側の意見を『一方的にふたたびわが党におしつけようとしたものである』（傍点および(?)——山本）と述べ、「不一致の点にふれないときめてあったにもかかわらず、その不一致の点を取りあげたのは、不当である、それは『一方的おしつけだ』と言いたてている。こここのくだりについても、すこしく注釈を加えておく必要がある。

イ、「最終段階での」という「赤旗」論説の言葉そのものが明示しているように、共同コミニケが毛主席との会見の席上で「最終的に」決められることになっていたのである。したがって、マルクス・レーニン主義の革命的基本的原則にもとる部分があれば、この「最終段階」で毛主席が修正意見を出すのは当然であり、出さなければむしろふしぎである。

ロ、「修正意見を出す」ことを「一方的おしつけ」と言うのは、下劣ないいがかりである。この種のいいがかりは、むしろ当の御本人たちによりよくあてはまる。つまり、「日共指導層」がソ連修正主義総本山を一枚加えてエセ統一戦線をつくろうなどというおためごかし、的提案を執拗にくりかえしているほうが、ずっと「りっぱな」な「一方的おしつけ」なのである。

ハ、「アメリカ帝国主義のベトナム侵略の兇暴化に直面し、国際的な反帝闘争の圧力のもとで二面的態度をとらざるをえなくなったソ連共産党指導部」という文句は、おそらく修正主義総本山にも「革命的要素」が残っているということをできるだけ好意的に描きだそうとして「日共指導層」総員がそのありったけの知慧をしぼってひねりだしたものであろう。

だが、いつも個人的利益がその唯一の動機となり推進力となっている俗物が手前勝手な効果をねらってやることは、えてして逆の効果を生むものである。ひいきのひきたおしとはまさにこのことで、右の文句ほど、「ソ連共産党指導部」の修正主義的変質ぶり、墮落ぶり、裏切りの本質を明示しているものはない。アメリカ帝国主義との親密な提携・交流・共存という「一面」だけを守ってきた「ソ連共産党指導部」は、その「二面的」関係を永続させたいと考えてきたのに、ここにきて、アメリカ帝国主義がベトナムをあまりにもひどく侵略するようになったので、そのまま黙っているというわけにはいけなくなり、また、ソ連以外の諸国人民のアメリカ帝国主義反対の闘争がいちだんともりあがってきた手前、その圧力におされてなんとかしなければならぬ羽目になって、そこで止むをえず、アメリカ帝国主義との親密な提携というこれまでの一貫した「一面」はそのままして、おいて、その上に——お義理として——ベトナム支援というもうひとつの「一面」をつけ加えて、首尾よく「二面的態度」をとることになった、とけんめいに述べたていらっしゃるのが、なんと「わが友」Ⅱ「日共指導層」なのである。つまり、「わが友」Ⅱ「日共指導層」は、「ソ連総本山」をなんとかして弁護しようとして、そのために「ソ連総本山」がもつとも悪質な、二心ある裏切りの修正主義集団であるという事実を述べたてているのである。

そしてまた、右の文句ほど、「日共指導層」じしんの俗物修正主義的変質、墮落、裏切りの本性を裏書きしているものはない。かれらは、右のようなもつとも悪質な、二心ある、裏切りの修正主義集団である「ソ連共産党指導部」を、どうしても一枚加えて、「反帝統一戦線」をつくるべきだと主張してやまない。「ソ連共産党指導部」の「二面的態度」を認めて、ただ「その誤りを批判す」れば、それでよい、それが「革命的、二面政策」だと強弁する。かれらにとっては、裏切り分子と提携すること、革命的、基本的原則をやぶることが、「革命的」なのである。そして、この裏切

りの「革命的二面政策」なるものを「正当化」するために、この「政策」をとらなければ「これをアメリカ帝国主義と同列の敵とみる反米反ソ統一戦線という立場をとるか、二つに一つだという、詭弁を弄する。ここで「反米反ソ、修」としないで「反米反ソ」としたあたりは、涙ぐましい努力のあとを示している。「反ソ」という文字によって、「反ソ人民」というひびきをふくませようという、切なる願いがそこに秘められているからである。だが、こういう小細工をつかって、「反米帝反ソ、修統一戦線」の正当性はすこしも傷けられるものではない。アメリカ帝国主義との緊密な提携・共存を第一に考え、「自国共產主義社会建設最優先主義」と「世界支配」をなしとげるためにアメリカ帝国主義の侵略・収奪・殺戮を黙過しているような裏切りの修正主義集団は、もちろん、申し分のない「アメリカ帝国主義と同列の敵」である。「現代修正主義が帝国主義支配層の味方であり世界勤労人民の敵である」という簡単自明の真理がその眼に入らず、また全然これが解らないのは、骨の髄まで腐った裏切りの俗物修正主義者だけである。

第四、「日本の革命」の問題については、直接討議の焦点にはならなかったが、しかし、「マルクス・レーニン主義の立場からみて正しい路線はいかにあるべきか？」という問題に関連して、真剣な討論がかわされたようである。「赤旗」論説は、ことさら「事実と真相」をぶちまけて「不当な非難に答える」と言っているが、この点について全く口をつぐんでいる。趙安博氏の「談話」によると、日共代表团は、「議會で安定した過半数をしめる」、「民族民主連合政府をつくる」、「社会党、公明党と統一戦線をつくる」、「民主的憲法があり、民主主義が発達しているの、佐藤は弾圧をヨイヤラン」などと述べたてて、フルシチョフ式修正主義綱領の「弁護」につとめたのにたいして、中共側は、「自国の修正主義、自党内の修正主義に真剣かつ徹底的に反対しなければならない」、「統一戦線は、必ず共通の基礎の上にうちたてられねばならない」、「平和移行の例は過去にも現在にもない」、「最悪の事態に備えなければならない」と主張したもようである。両者の主張

は、典型的な俗物修正主義路線とマルクス・レーニン主義的革命的路線との対立を浮き彫りに示しているものであり、したがって、両者の主張を並べてみるだけでその正否は掌を指すようにあきらかである。自国内では忠実な黨員や真面目な勤労大衆は「前衛党指導部」の下心ある詭弁、まやかし、はったりが見破れず、その手に乗せられることもありえようが、マルクス・レーニン主義の革命的な原則を堅持し、これを美事に適用・發展させて、中国革命をなしとげ、世界革命の先頭に立つて進んでいる「中国共産党指導部」にたいしては、その「權威的」詭弁、まやかし、はったり、その他いっさいの術策は全く通用しないばかりか、反対に、教祖盲従の俗物的修正主義者という醜惡な正体を完全にさらけだしてしまう結果とならざるをえない。右のように、「日本の変革路線」にかかわる重大な論争について「赤旗」論説がひと言もふれていないのは、これをとりあげることが、かれらにとってマイナスにこそなれ、プラスするところが全然ないからなのである。

ところで、「赤旗」論説が、「日本の変革路線」におよそ関係した討議内容について、いっさいふれることをしていないという事実は、もう一方において、きわめて重大な意味をもっている。というのは、「日共指導層」は、あとになって、「日中両党会談で、中共指導部は、日共代表団にたいして、ただちに武装蜂起すべきである、という、変革路線を強要した」という「事実」を精力的に宣伝してまわっているからである。この「即時武装蜂起強要」がもし「日中会談」でおこなわれたならば、「赤旗」論説は、まさに「鬼の首でもとった」ように、この「事実」を書きたてて、毛主席の指導する中国共産党への非難・攻撃をいちだんと「効果的に」大々的にやっていたことであろう。だが、残念ながら、いかに醜惡・下劣な俗物でも、事実無根のことを「事実」だとして相手におしつけることはできない。「事実と真相にもとづき」とうたった手前、「事実と真相」とはまったく関係ないウソツパチは書き立てるわけにはいかない。それゆえ、

「赤旗」論説が精々気張って、「事実と真相にもとづき」「不当な非難に答える」といって、あらんかぎりのいいがかりを並べたてながら、「即時武装蜂起強要」なるものについて、ひと言もふれていないという事実、それが事実上影も形もなかったことを裏付けるものであり、したがって後日、「日中両党会谈で中共指導部が即時武装蜂起を強要した」という全くのデマをふりまいて勤労大衆の間に反中国・反毛主席の考え方を植えつけようと狂奔した「日共指導層」の驚くべき品性をすっかり暴露するものともなっているのである。

三

第五。「最終段階」で基本的原則にかかわる意見の一致がどうしてもえられないために、共同コミュニケは成立せず、「会見はなかったことにしよう」「お互いに精神的負担がなくてすむ」ということで、会谈は終了した。だから、日中両党会谈は、なんらの「収穫」もなく、あとになにも残らない形ですんでしまったようにみえる。だが、はたしてそうであろうか？

形の上では、実際なにも残らなかった。しかし、無形のうちにはつきりと残ったものがある。それは「ソ連共産党指導部にたいする態度」「ベトナム支援反帝統一戦線はいかにあるべきか」という問題についての考え方」および「日本の変革路線のあり方」という、三つのきわめて重大な問題についての、両党指導部の見解がきわだって対立したものであるということ、中共指導部の厳密にマルクス・レーニン主義の革命的基本的原則を守りぬくという真に革命的な首尾一貫した見解にたいして、「日共指導層」のそれは、革命的基本的原則の立場から完全に足をふみはずし、フルシチョフ教祖と総本山に全面的に盲従する俗物的修正主義でしかないということ、——この動かすことのできない

「事実と真相」が、両当事者にとって明白となった、ということである。では、両党会談を通じて、かれら自身、教祖・総本山と全く同質のもの、つまり、もつとも悪質な、二心ある、裏切りの修正主義集団であり、その標識が典型的なフルシチョフ式綱領Ⅱ「日共綱領」であるということをも身にしみて痛切に感じとった「日共指導層」は、いったい、どういう「教訓」をえたか？　かれらは、教祖直伝のもつとも悪質な、二心ある、裏切りの修正主義を完全にとりのぞくように、けんめいの努力をかたむけたであろうか？　すくなくとも、その「日共綱領」がフルシチョフ式修正主義の「結晶」であることについて、なんらかの真剣な反省をしようとしたであろうか？　とんでもない、かれらはいまだかつて自己批判や真剣な反省など、しようとしたためしはない。かれらの念頭にあるのは、「共産党指導部」という絶対に得がたい地位をどんなことをしても、——まさに、*“あらゆる犠牲を惜しまず”*——守りぬくこと、自己保身第一である。かれらが、真つ先きに考えたことは、この会談の内容がいずれ早晚日本国内にも知られるであろうこと、そのときには、かれら自身の俗物的修正主義者、教祖盲従の裏切り分子という正体は、いやおうなしに、日本の全勤労人民の前にはっきりさらけだされるであろうこと、そうなれば、これまで「指導部」の「権威」をかさに、修正、改ざん、ペテン、はったり、詭弁と引き回し主義でようやくありついていた「指導者」の地位も、早晚、かれらの手からすべり落ちてしまふにちがいない、ということである。日本の勤労人民の運命など、どうでもよい。真剣な自己批判や反省など、保身にとっていっただけプラスするというのか!?　しかし、「この会見はなかったことにしよう、発表しないようにしよう」という中共指導部の「意思表示」があり、中共指導部が約束を守ることが確実に考えられるので、「日共指導層」は、会談の内容をひたかくしにし、それが世間に洩れることができるだけ先きになることをねがい、またその間に知れ渡ったばあいの対策をあれこれ練っていたものと思われる。つまり、戦

々競々として会談内容がいつ洩れるかと警戒していた矢先、突如としてあらわれたのが、「人民大学紅衛兵」の長文の壁新聞のうちの、針でつついたようなたった一つの文句——「修正主義の日本共産党」——である。「日共指導層」は、この文字を読んで、すぐさま、日中両党会談の内容は全部中国の国内では公表済みであり、したがって、「もっとも悪質な、二心ある、裏切りの修正主義集団」という本性は、ことこまかにすっかり中国の人民大衆に知れわたっていると思ひこんだのである。同じ事実が日本の勤労人民に知れわたれば、まさに「命とり」である。猶予はできない。窮地に立った俗物が考えだす手は、その本性にぴったりのもの、つまり、会談内容が万一にも日本の勤労人民に伝わることにないように、また伝わるまえに、「先制攻撃」をかけてこれを封じこめておこうというやり口である。そこで急遽発表されたのが「赤旗」論説である。これは、いち早く会談内容について「事実と真相」が明るみに出ないように、ありもしない「事実経過」を並べたてることが第一の狙いであり、いまひとつ、そのデッチ上げの「事実」にもとづいて、まったくいわれのない、いがかりと下劣な中傷を書きたてて、中共指導部にたいする「不信と輕蔑の念」を勤労人民の心のかきたてようと狙ったものである。

「赤旗」論説が書きたてているいわれのない、いがかりや中傷については、前節ですでに指摘したが、こうした下劣な、いがかりや中傷では、良心的な黨員や真面目な勤労人民の眼をごまかすことは、とうていできない。かえって、「日共指導層」自身の手につけられない俗物修正主義の本性をますます裏づけるだけである。たとえば、「毛主席の修正意見を拒否したので『修正主義の党』というレッテルをはっているのは、まったく虚偽にもつく一方的な判断だ、わが党にたいする侮辱的な挑戦だ」という、いがかりをみてみよう。「指導者の意見を拒否するということを理由にしたちまちま反党主義者のレッテルをはりつける」のは、「日共指導層」のお家芸である。だが、この会談では出る幕はな

かった。会談の全過程を通じて、「日共指導層」が一九五六年くらい一貫して教祖・総本山に盲従している俗物的修正主義集団であるという事実がいやおうなしに明るみに出ただけである。この事実を言葉でいいあらわせば、「日共指導層は俗物的修正主義集団である」ということになる。それはレッテルではなく、事実からひきだした、事実の正確な表現である。「拒否したので、レッテルをはった」などという、自分たち自身の身にしみついた下劣なお家芸を、中共指導部におしつけるとは、なんと恥しらずな手合であろうか！ところが、このでたらめないいがかりではまだ所期の効果をあげるには足りないかと判断したこの裏切りの「指導層」は、「中国の内部では、毛沢東同志の言説に無条件に盲従するかどうかこそが『マルクス・レーニン主義か修正主義か』の試金石だといった命題がまかりとおっている」という、まったく驚くべきデッチアゲを書きたてることまでしている。こうした全く事実無根の悪質なデマと悪罵を並べたてても、裏切りの俗物はまだ心が休まらない。会談内容は、事実としてどうしても曲げようはなく、いずれすつかり明るみに出てしまうからである。そこで、この裏切りの俗物どもは、猿知慧のあらんかぎりをしぼって、ここに「即時武装蜂起強要説」なるものをこしらえあげ、これをさも「事実」であるかのようにまきちらすという、非常手段を考えだした。だが、これはまさに非常手段であるので、まきちらすにはひと工夫を要する。「赤旗」論説でこれを「事実と真相」と称して書きたてれば、たちまちそのウソツパチをつかれるであろう。そこで、考えだしたのは、はじめは「風評」として世間にばらまき、「週刊誌」などにもどしどし書きたてさせ、大体の「下地」をつくっておいてから、今度は公式文書で大いに書きまくる、という手である。二心ある裏切りの俗物の考えることは、いつでも醜悪、下劣なものではない。「た、だ、ち、に、武、装、蜂、起、に、と、り、か、か、れ」などということは、この言葉の意味がわかるほどの者ならば、誰ひとりとして主張できるものではない。誰ひとりとして唱えるものがない説をば、「毛主席が強要した、中国共

正しい批判はいかにあるべきか

九六

産党指導部に盲従する極左日和見主義分子がふりまわしている」と書きたてつづけるという、この下劣な品性！

つぎに、こうして「下地」をでっちあげておいたところで今度はおおっぴらに書きたてはじめてきたものを、すこし引用してみよう。

【例一】

「極左日和見主義者たちの『革命的』方針なるものの第二の特徴は、権力獲得の方法の問題で、『暴力革命はプロレタリア革命の普遍的法則である』など(?)と称して、『暴力革命』すなわち武装蜂起あるいは革命戦争による権力の奪取を革命のただ一つの方法として絶対化し、ただちに武装闘争によって権力を奪取する準備にとりかかることが、共産党の当面の中心任務だと主張していることである」(傍点、ゴシック体および(?)——山本)。

これは、さきの「赤旗」論説が公表されてから三ヵ月たった四月二十九日に、同じく「赤旗」紙上にその全紙面を埋めて大々的に発表された「評論員」の論文、『極左日和見主義者の中傷と挑発——党綱領にたいする対外盲従分子のデマを粉碎する』の中の一節から抜いたものである。この「評論員」なるものの大論文は、おそらく現「日共指導層」の「全知全能」を結集してできあがったものとおもわれるが、日中両党会談の「事実と真相」が日本の勤労人民のあいだにたたく行きわたることをいちはやく妨害して、「デマと挑発と中傷」をつらねて中共指導部に「先制攻撃」をかけ、それによって俗物的修正主義集団という醜惡な本性がばれてその得がたい地位からすべりおちるのを未然に喰いとめようとした、まさに「必死の策」として生れたものである。そのために、この論文は、「赤旗」紙上に発表されてからあと、パンフになり小冊子になりして、けんめいに全国にばらまかれたものである(前記の引用は、日本共産党中央委員会発行の単行本の一九ページよりとったものである。本論稿での引用は、すべてこの単行本によることにした)。

このいわゆる『四・二九論文』は、「強力革命はプロレタリア革命の普遍的法則である」というマルクス・レーニ

ン主義の基本的命題をやっつけ、「国会で安定した過半数を占めて民主連合政府をつくり、革命の条件を有利にする」という、骨の髄からの日和見主義的「日共綱領」を「正当化」しようとして、マルクス・レーニン主義の基本的原則についてありとあらゆる修正、改ざんを加え、各種各様の論理的ペテン、まやかし、詭弁、レッテルはりをつらねているものであるが、見方によっては、これは、「日共指導層」の下劣で醜惡な品性を全面的にさらけだしているもの、そして、かれらがつかういろいろな「理論的武器」、つまり屁理窟と手練手管のいっさい合財を公開してくれているものと考えることができる。その中で、とくに右の「即時武装蜂起強要説」なるものに関連して「日共綱領」の「必然的」成立について述べたてている、きわめて重要な、示唆に富んだ個所があるので、節をあらためてこれを紹介し、必要なかぎりで考察を加えておきたいとおもう。ただし、この個所は、たちいった考察を加えるべき部分がきわめて多く、またそこから引き出すべき教訓もきわめて豊富であるので、この個所は【例三】としてあとにまわし、それよりもさきに、宮本書記長による「断定」をつぎにみておくことにしよう。

【例二】

「宮本 私どもは、毛沢東自身のいまとっている路線はマルクス・レーニン主義の道からはずれているし、ことに毛沢東を世界革命の最高の指導者というふうにして、『中国方式に賛成しないものはみんな日和見主義だ、反革命だ』というような点が、文化大革命で国際的に(?)非常に強調されたが、こういふもの(?)は一時的に中国でその路線で收拾がついたとしても、真の收拾ではないと思う。必ず共產主義の原理に即した正しい意味(?)の調整(?)という時期がくるというふうと考えている。ですから私どもは一部の人が誤解するように、われわれから『中国の毛沢東の路線はけしからんから、われわれは、こう、こうだ』という論争(?)をしかけたのではなく、中国から、彼らの方から『われわれの路線を礼賛しないから反革命である。修正主義だ』という攻撃(?)をしたから、これに反撃しているので、私どもは党と党というものの間にいろいろな意見の相違があつても(?)共通の問題では一致してやるべきであるという考えをいまだに持っています。だからいま、中国のああいふぐる

一、プ（!?）がわれわれに、彼らのドクトリンを強制しないという立場で、アジアの共通の課題（!?）で一緒にやるという立場をとるなら、いまでもわれわれは党と党との関係も回復できる」（毎日新聞社編『共産党政権、下の安全保障」、一九六九年五月、一六〇ページ、傍点および（!?）——山本）。

この『共産党政権、下の安全保障』という座談会記録は、「日共指導層」が修正主義的「前衛党」から完全に顛落していまや申し分のない俗物的小ブル政党内成り下ったことを動かしがたく実証している、的確な「里程碑」である。その中には、かれらが自民党並みの俗物的煽動政治屋に落ちこんだことを明白に示す、まことに興味ある発言が数かぎりなく出てくるが、その中のもっとも出色なものは、あとでまたお目にかかる機会もあろう。右の一節にも、その、反動的代議士顔負けのデマと詭弁がよく出ている。

第一。宮本氏は公然と、「中国から、彼らの方から『われわれの路線を礼賛しないから反革命である、修正主義だ』という攻撃をした」と言っている。いったい、いつ、どこで、誰がこういうことを主張したか、言ってみるがいい。いやしくも、「共産党」と名のつく政党の「書記長」ともあろうものが、なんという下劣なデマを弄することか！ 自分たち自身の修正主義的「綱領」、教祖盲従の日和見主義的正体をつかれて窮した裏切りの俗物どもがつかえる手は、もはや、最低の反動的政治屋よりも程度のわるいデマしかないというのか！

第二。毛主席のひきいる中国共産党指導部を指して「中国のああいいうグループ」という言葉を投げつけるとは、なんという、なさけない煽動政治屋であろうか！ 日中両党会談で宮本氏自身日共代表団団長として相對したのは、毛沢東を主席とする中国共産党指導部ではなかったのか！ 俗物的修正主義者で教祖の忠実な弟子である宮本氏が「中国のフルシチョフ」劉少奇の「グループ」をなんとか「勝たせたい」という気持はよくわかるが、こういう悪罵というものは、ただわが身に返ってくるだけのものである。宮本氏一派がどういう「グループ」であるかは、のちほど

第三、「党と党との間にいろいろな意見の相違があつても共通の問題では一致してやるべきである」というのも、一見りっぱなようだが、これは私利私欲でいつもくつついたり離れたりするブルジョア政党と同じ立場だということをさらけだしているものである。ブルジョア政党ならばいざ知らず、マルクス・レーニン主義的革命党にとっては、革命的、基本的、原則の問題について「意見の相違」があるはずはなく、またあつてはならない。革命的、基本的、原則の問題についての意見とこれに直接関連しない問題についての意見とをごたまぜにし、「いろいろな意見」という雑言^{ザツ}で革命的、基本的原則の決定的意義をぬりつぶしてしまうところに、二心ある、俗物的修正主義者の本領がうかがわれる。原則にはおかまいなしになんでも「共通の問題で一緒にやる」というのは、まさに典型的なブルジョア政治屋である。いったい、反革命的裏切りの修正主義者どもと「一緒にやつて」なにをやるというのか!?

第四、この書記長氏の話し方が明瞭に示しているのは、いまや「日共指導層」がつねに念頭においている当の相手、もっぱらその人々に話しかけ、自分たちの思想をしみこませようと努力している相手は、ほかならぬ小ブルジョア層だ、ということである。小ブル的な俗物的思想のとりことなっている教祖盲従的修正主義者どもがけんめいにその票を獲得しようとあせているのは、まさに小ブル的俗物であり、その同情と支持をかきあつめるためにつかう手は、いつも、自分については手前味噌の羅列、真正マルクス・レーニン主義者にたいしてはデマとレッテルはりなのである。⁽⁵⁾

第四。この書記長氏の話し方が明瞭に示しているのは、いまや「日共指導層」がつねに念頭においている当の相手、もっぱらその人々に話しかけ、自分たちの思想をしみこませようと努力している相手は、ほかならぬ小ブルジョア層だ、ということである。小ブル的な俗物的思想のとりことなっている教祖盲従的修正主義者どもがけんめいにその票を獲得しようとあせっているのは、まさに小ブル的俗物であり、その同情と支持をかきあつめるためにつかう手⁽⁵⁾は、いつも、自分については手前味噌の羅列、真正マルクス・レーニン主義者にたいしてはデマとレッテルはりなのである。

(5) この種のブルジョアの煽動政治屋的やり口というものは、書記長よりずっと小物コギキになると、いきおい、さらに一段と程度が悪くなる。教祖盲従の画期的産物Ⅱ「日共綱領」を決定した日共第八回大会いらい、その一貫した「忠勤」によって「政策

正しい批判はいかにあるべきか

正しい批判はいかにあるべきか

一〇〇

委員長」という、自民党並みの「重要ポスト」にありついた上田耕一郎氏は、書記長にしたがって出席した右の座談会の席上で、「中国の日共にたいする態度」についての質問にこたえて、こう述べている。

「中国の最初の第一点ですね。四つの敵ということ、ソ連、米国、日本の反動勢力、それから日本共産党となっていますね。日本共産党は、反日共をやめろということをお前提にするかという問題ですが、言葉をかえていえば、(19)、日本共産党だけでなく、日本共産党と民主勢力(19)を敵視して、日本共産党打倒ということをいっているわけですから、内政干渉の問題なんです」(前出、一七八ページ、傍点および(19)―山本)。

窮地におちいった二心ある、俗物的修正主義者にとっては、事実をゆがめること、事実無根のデマとペテンを弄する以外には救われようはない。中共指導層は、「日共指導層」にたいして、また「日共指導層」が教祖に盲従してでっちあげた「日共綱領」にたいして、マルクス・レーニン主義の革命的基本原则から完全にはずれたもの、これを裏切る、二心ある俗物的修正主義だと的確に批判しているのである。「日共指導層」が教祖に盲従する俗物的「修正主義集団」だということを、すこしでも歴史的事実を知っている人で、解らない者があろうか！ ペテン師上田氏は、この「日共指導層」をば、故意に「日本共産党」全体におしひろげる。こうすることによって、日本共産党の誠実な平党员(ひらぎん)たちに、「中共はお前たちを攻撃しているのだぞ」という「おどし」をかけて、平党员たちに「反中共」熱をおおるのである。ところが、おどろいたことに、上田氏はさらに、「言葉をかえていえば」などという、全く見当ちがいの文句を挿入して、中共指導部は「民主勢力」を敵視しているのだ、などという、とんでもない「説明」を展開する。「日共指導層」という明確な文字の中に、「日本の民主勢力」という意味を発見するとは、なんという、世紀的ペテン師であろうか！ 窮地から脱けるために、手段をえらばず、中共指導部にたいして「日本の民主勢力」までけしかけようと躍起になった裏切りのペテン師も、これでは正体がばれようというものである。だが、これによってわれわれはまた、「日共指導層」の中にあつて点数をかせぐのは、並みたいいのことではないということを、つくづく思い知らされるという機会にめぐまれるのである。

そこでつぎに、『四・二九論文』の問題の個所についてみてみよう(①②……は、説明の便宜上、山本のつけたもの)。

【例三】

「①対外盲従反党分子たちが、わが党綱領の革命路線に對置してもちだしている『革命路線』なるものが、マルクス・レーニン主義的見地とは根本的に對立する極左冒險主義の路線にほかならないことは、これまで、その三つの主要な特徴についてみてきたとおりである。そして、最後に指摘する必要があるのは、これが、一九五〇年のわが党の分裂の時期に党の一部に採用されて党と革命の事業に重大な損害をあたえた極左冒險主義の方針を、無批判に、『復活』させたものだということである。

②一九五〇年以後、わが党は、アメリカ帝國主義の兇暴な弾圧によって半、非合法状態におかれると同時に、これを重要な契機として中央委員会は事実上(一?)解体され、党組織全体が分裂するといふきわめて困難な事態におちいった。この党の分裂の時期に、分裂した党の一部は、山地、山村に根拠地を建設し、都市と農村で長期にわたって抵抗自衛闘争を展開し、人民自衛組織を建設するという極左冒險主義の方針と戦術を、なかば公然と(二?)採用した。この極左冒險主義の誤りは、大衆のなかでの党の権威を傷つけ、党と大衆とのむすびつきをいぢるしくよわめ、党と革命の事業に、政治的にも組織的にもきわめて大きな損害をあたえた。一九四九年に十数万あった黨員の数が、一九五八年の第七回党大会の當時には数万の党勢に激減し、選挙での得票数も、一九四九年一月の衆議院選挙における三百万票弱から一九五三年四月の選挙の六十五万票へと大幅にへったが、このことは、アメリカ占領軍の兇暴な弾圧による打撃とともに、党の分裂および極左冒險主義の誤りの深刻な結果をしめしたものであった。

③この極左冒險主義の方針は、理論上、政治上のいくつかの誤りがむすびついてうみだされたものであるが、ここでとくに注目する必要がある第一の点は、極左冒險主義の方針と五一年綱領に定式化された『暴力革命唯一論』の立場とのきりはなすことのできない関連である。党の分裂状態のもとで、党の一定部分が採択した五一年綱領は、日本の革命の展望について『日本の解放と民主的変革を、平和の手段によって達成しようとするのは、まちがいである』と規定し、革命の平和的發展の可能性を全面的に否定する『暴力革命唯一論』の立場を明確にしていた。これは、戦後の初期に党がおかした『占領下の平和革命論』にもとづく(三?)右翼日和見主義の誤りにたいする機械的な反発(四?)から、他の極端な誤り(五?)におちいったものであり、サンフランシスコ条約の締結以後の情勢の変化——アメリカ帝國主義の公然とした全面的な占領支配から、サンフランシスコ体制にもとづく(六?)半占領状態への変化——が、平和的手段による変革の歴史的、理論的可能性(七?)をうみだしたことを見おとした、一面的な規定(八?)であった。この一面的な規定が、長期の抵抗自衛闘争によって将来の『武力革命』を準備するという極左冒險主義の誤りのひとつの政治的、理論的基礎をなしたことは、明白である。

正しい批判はいかにあるべきか

④第二の重要な点は、この極左冒險主義の誤りが、中国の『人民戦争』の経験の機械的、事大主義的な適用とむすびついていたことである。当時、一九四九年に全国的な解放を実現した中国革命の偉大な勝利を背景として、国際的にも、人民解放軍と、その根拠地を建設し長期にわたる武装闘争によって勝利を獲得した中国革命の経験を、帝国主義の抑圧のもとにあるすべての植民地、すべての従属国の人民の解放の道として一般化する傾向(？)がつよまっていた。そして、一九五〇年の党の分裂の時期にわが党の内部問題に介入した外国の諸党は、アメリカ帝国主義の支配下にあるという理由で高度に発達した資本主義国である日本をアジアの旧植民地諸国と同一視し、植民地従属国の解放闘争の基本的な道として不当に一般化(？)されていた中国の『人民戦争』路線を、わが国にも適用することを主張した。山村根拠地の建設や自衛闘争と自衛組織などを強調した極左冒險主義の方針は、一つには、このような外国の諸党の大国主義的なおしつけにたいし、わが党の一部が誤った事大主義的態度をとった結果だったのである。その後、わが党が、極左冒險主義の誤りを克服した(？)のち、中国共産党の責任ある人びとは、この時期の問題について、ふたたびこのようなこと(？)はくり返されてはならないという見地をわが党の代表に表明したことがある。

⑤わが党は、第七回党大会での五〇年問題の総括および第八回党大会にいたる綱領討議の過程で、『占領下の平和革命論』の右翼的な誤りを正しく克服する(？)と同時に、極左冒險主義の誤りをうみだした理論上、政治上の基礎にたいする徹底的な批判(？)をおこない、いかなる外国の党の路線や理論にも無批判的に追従することなく、日本の党自身が、日本革命を指導する日本の労働者階級の前衛党(？)として、マルクス・レーニン主義を自主的に(？)日本の情勢に適用し、それによって日本革命の前進の道をみずから切りひらいてゆくという自主独立の(？)確固とした立場をうちたてた。そして、革命の移行形態の問題についても、わが党は、革命の平和的移行を『唯一の道』として絶対化する修正主義者(？)の右翼日和見主義的な『平和移行必然論』に原則的な批判をくわえるとともに、五一年綱領に定式化されているような、平和移行の可能性を全般的に(？)否定する極左日和見主義的な『暴力革命唯一論』をも正しく克服し(？)、『マルクス・レーニン主義党としては、革命への移行が平和的な手段でおこなわれるように努力するが、それが平和的となるか非平和的となるかは結局(？)敵の出力による(？)』という革命の移行形態の二つの可能性(？)を全面的に考慮にいたれたマルクス・レーニン主義の見地を確立した(？)のである。この問題についてのわが党の綱領の見地は、共産党・労働者党代表者会議の宣言と声明に定式化された国際共産主義運動の理論的達成(？)をたんに受動的にうけいれたものではなく、わが党自身の歴史的経験(？)および自主的な理論的究明(？)による一貫した裏づけをもったものなのである(前出、三三—三六ページ、傍点、ゴシック体および(？)、(？)——山本)。

つぎに、右のうちとくに当面緊切な意義をもつと考えられる論点をとりだして、すこしく検討を加えてみよう。

一 まず最初にあげられるのは、②の冒頭の「一九五〇年以後、わが党は、アメリカ帝国主義の兇暴な弾圧によって半合法状態におかれると同時に、これを重要な契機として中央委員会は事実上解体され、党組織全体が分裂する」というきわめて困難な事態におちいった」という文章である。筆者の「評論員」氏は、「一九五〇年以後」などと書いてその時期をばやかすほど猿知慧はまわるが、しかし、この文章全体が「日共指導層」の本性を自身ですっかり暴露しているという事実には、ちつとも気がつかない。まず「アメリカ帝国主義の兇暴な弾圧」という具合にアクセントをつけてはみたが、その中味といえば、一九五〇年六月のマッカーサー元帥による「共産党中央委員二四名の公職追放とアカハタ紙発禁」にすぎない。むしろ非法下の活動が「常態」である革命党からみれば、「レッド・ページ」のごときは多少の制限のついた「合法状態」でしかない。帝国主義的支配のもとではいつでも「完全な、保証つきの合法状態」などというものはないのだ。「レッド・ページ」を「兇暴な弾圧」といい、「半合法状態においやられた」などと書きたてているのは、そのために「党が壊滅状態におちいった」ことを「正当化」しようとの卑劣な下心があつてのことである。それにしても、われわれが驚嘆させられるのは、たった「レッド・ページ」ひとつで、たちまち「事実上中央委員会が解体し、党組織全体が分裂」してしまったということ、この事実を「評論員」Ⅱ「日共指導層」が平然と認めて書きたてているということである。「日共指導層」は、こういう歴史的、事実を書きたてること、かろうじて、「山村工作運動」その他の「極左冒險主義」が「分裂した党の一定部分」だけによって唱えられたものという「印象」がつくりだせると思ひこんでいるようであるが、お気の毒にも、右の文章は、それと正反対のことを明確に物語るものとなっている。第一に、明示されているのは、「レッド・ページ」ひとつでたちまち「壊滅」におちいるような「日共指導層」はもともと真の「共産党

指導部」などといえる資格はさらさらないものだ、ということである。「合法活動と泰平ムード」にうつつをぬかして、理論も組織も活動もすべて俗物的改良主義のぬるま湯につかりきったものとなっているということ、「指導層」のみならず、その右翼日和見主義的「指導」でひきまわされている下部組織にいたるまで「合法性」と「平和移行」熱にうかされて完全に骨抜きになっている、ということである。第二に、「党が壊滅状態におちいった」という深刻な事態を前にして「日共指導層」の頭を占めるのが、党の中核を成す「革命理論と組織原則、活動方法」の真剣な再検討ではなくて、なんと「党員数と得票数」だけだという事実である。これは、まさに俗物的ブルジョア政治屋の見地である。第三には、「合法性と泰平ムード」で骨抜きになっていた「日共指導層」が、「レッド・パージ」を受けてその「弾圧の兇暴さ」を身にしみて痛感させられたのであるから、かれらがそのあとでどんな道をえらぶかは簡単にわかる。「兇暴な弾圧」でまたぞろ「党員数激減、得票数大幅減少」をくらうのはもうこり、こりである。いや、下手をすれば「中央委員会解体、党組織全体分裂」は必至だ。「強力革命」をふくめて、今後「兇暴な弾圧」を誘発する恐れのある革命的、半革命的な方針と活動は、いっさい断固として排撃する。いや、「兇暴な弾圧」を喰う可能性がすこしでも生ずることのないように、「わが党は、今後いっさい革命的と名のつく理論や行動はとりません。万事民主主義と平和でやります。プロレタリア独裁などというおそろしい言葉は、わが党には無縁です」と広く天下に——とくに支配者層と小ブルジョア層に——周知徹底させることが先決問題だ。こうして必然的にうまれたのが「日共綱領」であり、第二〇回大会でのフルシチョフ教祖の「報告」は、その絶好のきっかけと「材料」を提供することになったのである。

二 つぎにきわめて重大なことは、「評論員」氏が、この中で、歴史的事実の経過とその意義について、まったく

誤った説明をあたえ、あるいは故意にゆがめ、改ざんしたりして、「合法性と平和」のしみついた修正主義路線の設定をなんとか「正当化」しようとしていることである。まず全文の中から、「評論員」が説明している「事実経過」なるものを「歴史的に」追って記してみよう（6、7は山本が入れたもの）。

1 「戦後の初期」に『占領下の平和革命論』にもとづく右翼日和見主義の誤りをおかす」。

2 「一九五〇年、アメリカ帝国主義の兇暴な弾圧↓党の分裂・解体」。

3 「一九五〇年、党分裂期に、外国の諸党、わが党の内部問題に介入」。

4 「一九五一年綱領」——「分裂した党の一部の極左冒險主義」。

初期の『占領下の平和革命論』にたいする機械的反発」。

5 「一九五一年九月、サンフランシスコ条約締結↓「情勢の変化」↓「アメリカ帝国主義の公然・全面的な占領支配からアメリカによる半占領と事実上の従属国の状態を内容とするサンフランシスコ体制への変化」(「第七回党大会報告」)↓「平和的手段による変革の歴史的、理論的可能性をうみだす」。

(6) 一九五六年三月、日本共産党中央委員会『ソ同盟共産党第二十回大会について』を発表。

(7) 一九五六年六月、日本共産党第七回中央委員会総会の決議『独立、民主主義のための解放闘争途上の若干の問題について』

8 一九五八年七月、「第七回党大会での五〇年問題の総括および第八回党大会にいたる綱領討議」——『占領下の平和革命論』の右翼的な誤りを克服、「極左冒險主義の徹底的批判」、「いかなる外国の党の路線や理論にも無批判的に追従することをやめ、自主独立の確固とした立場をうちたてた」、——「日共綱領」。

そこで、はたして「評論員」が並べたてている「歴史的経過」なるものが正しく事実、に合致したものであるかどうかを、すこしたちいって吟味してみよう。

まず、1 および 2 に関連して。問題の「外国の諸党の日共内部問題への介入」について、「日共指導層」の「占領下の平和革命論」がいかに批判されたかを見てみよう。この批判を最初に展開したのは、一九五〇年一月、「コミンフォル

ム機関紙」第一号所載、署名者「オブザーバー」の『日本の情勢について』という論文である。つぎにその主要な部分を抜粋してかかげよう。

「米国の掠奪者どもは日本占領軍や日本反動の手をかりていっさいの民主運動を弾圧し、共産党、労働組合を粉砕しようとし、また日本の真の主人公になろうと大膽である。すでに現在米軍部は日本のいっさいの政治、経済面の支配をふるっている。

日本経済は完全に米独占資本の手中にあり、米帝国主義の侵略計画に奉仕させられている。米国側は日本に海空軍基地を大々的につくり軍需工業を拡張し、日本軍部を再武装し日本を軍事的冒険の基地にしている。」

「日本の反動勢力はアメリカが日本にもっている利害関係を利用し、自分の政治勢力拡張につとめており、また一方アメリカ帝国主義者も容易に各民主主義団体を打倒し、日本の政治的経済的支配を達成し、日本を軍事冒険の基地とし、日本人民を肉弾とする道具として日本の反動勢力を利用しているのである。現条件下において日本の勤労者は明確な行動綱領をもつ必要がある。

共産党組織、労働組合およびすべての民主主義勢力は勤労者を結集し、日本における外国帝国主義者の植民地的計画と日本反動の裏切りの反人民的役割を毎日にわたって暴露しなければならぬ。かれらは日本の独立、民主的平和愛好日本の樹立、公正な講和条約の即時締結、アメリカ軍の日本よりの急速な撤退、諸民族間の強固な平和の保障のために、決定的な闘争をおこなわねばならぬ。……………」

しかるに、日本の共産党の若干の活動家が、これらの最も重要な課題を成功的に遂行しようとしていないことは事実が示している。かれらはこの綱領を理解せず、国内に生じた複雑な情勢下にあつて日本の勤労者に間違つた方向を与えている。たとえば、日本共産党の有名な活動家野坂（岡野）は、日本の対外的国内的政治情勢を分析して、戦後の日本が占領下においても社会主義への平和的移行を確保するために必要なすべての条件をそなえているし、これがあたかもマルクス・レーニン主義の日本の土への適用である（野坂、一九四七年一月、日本共産党第二回全国協議会報告）かのごとく説いた。占領軍について、野坂は、日本共産党の目的を阻害しないばかりでなく、反対に占領軍はその使命を遂行しつつ日本の民主化に貢献するであらう、という意見を述べている。

野坂はまた、『連合軍の駐屯は日本を非武装化すると同時に、日本人民を全体主義的政策から解放し日本を民主化するものである。日本占領軍は日本を植民地化する意図を持っていない』とし、さらに日本共産党は占領下においても労働者階級を政權に導くことができるという意見を述べている。すなわち、野坂は確言している。

『プロレタリア党は国会内で多数の議席を占め、自分たちの政府を作り、官僚機構とその勢力を破壊して、政治権力を手中に収め

得る可能性ができた。換言すれば、民主的方法によって国会を通じ権力を握る可能性ができた。』

一九四九年七月、野坂は日本共産党中央委員会総会における報告において、新たに占領下において人民民主政権を作ることとはもちろん可能であるとキッパリ確言した。

『占領軍はこのような政府がつくられしだい、日本から撤退するであらう。』

このように野坂は、米占領軍が存在する場合でも、平和的な方法によって日本が直接社会主義へ移行することが可能であるというようなブルジョア的な俗物的言辭を吐いている。これらの見解を野坂は以前にも言った。たとえば、彼らが準備し公表した共産党の宣言案にも、また一九四六年五月ブルジョア新聞たる『毎日新聞』に公表された論説にも、野坂はつぎのように広言している。『人民の多数の支持に依拠し人民自身の努力に頼り、党は平和的な手段で資本主義よりもっと完成された社会主義制度に發展せようと企図している。』

日本における米占領軍があたかも進歩的役割を演じ、社会主義への移行を目的とする『平和革命』を支持するだらうという野坂の見解は、日本人民を混乱におちいらせ、外国帝国主義者が日本を外国帝国主義の植民地的従属物と化し、かつ極東における新しい戦争の根源地にかえようとするのを助けるものである。

完全に外国帝国主義勢力の支配下にある第二次大戦後の日本において、あたかも日本を平和的に社会主義国家に移行させるような条件が作られたというような、また日本の条件にマルクス・レーニン主義を『適用』するというような『新』理論をでっちあげようとする彼の企図——すべてこのマルクス・レーニン主義の『適用』なるものは、反動を民主主義へ、また帝国主義を社会主義に、それぞれ平和的に成長転化できるという反マルクス主義的、反社会主義的『理論』の日本版にすぎない。

この理論が労働者階級にとつてなんらの縁もゆかりもない理論であることは、すでに久しい以前に暴露されている。

野坂の『理論』は、日本の帝国主義占領者美化の理論であり、アメリカ帝国主義称讃の理論であり、したがってこれは日本の人民大衆を偽まんする理論である。

野坂の『理論』がマルクス・レーニン主義とは縁もゆかりもないものであることは、明らかである。本質上、野坂の『理論』は、反民主的、反社会主義的理論である。それは日本の帝国主義的占領者と日本の独立の敵にとつてのみ有利である。

したがって野坂の『理論』は、また同時に、非愛国的理論であり、反日本的な理論である（傍点およびゴシック体—山本）。

これが、和製「評論員」氏のいうところの「外国の諸党、わが党の内部問題への介入」の第一弾である。この、きわめ

て的確にして厳密なマルクス・レーニン主義的批判にたいして、「日共指導層」はなんと答えたか？——それは、つぎのような二心ある、裏切りの俗物修正主義者の醜惡な品性まるだしのデマとや、っつけただけであつたのである!!

「党攪乱のデマをうち砕け（「アカハタ」一月九日）

同志野坂にかんするUPその他の電報は、党の結束をかきみだそうとする明らかな敵(?)の挑発行為(?)である。われわれがもし外国電報を信ずるならば、同志スターリンはすでに二十たび死んだであろうし、同志毛沢東は十たびアヤマリをおかしたことになるであろう(?)。

今後とも闘いの激化とともに、矢つぎばやにおこなわれるであろうと思われる敵(?)のこうした挑発行為(?)にたいしては、つねに、全黨員はこの種の党攪乱の陰謀にいさかもまどわされず、結束して、たちどころに(?)これを粉碎(?)しなければならない。

日本共産党中央委員会政治局・日本共産党統制委員会（傍点および(?)——山本）

「これを信ずるならば、スターリンは二十たび死んだことになり、毛沢東は十たびアヤマリをおかしたことになる」!! なんと裏切りの俗物にうってつけの弁ではあるまいか!! だが、「敵の挑発行為」でも「党攪乱の陰謀」でもなく、れっきとしたコミンフォルムの公式批判だということがはつきりしてくると、この醜惡な俗物的修正主義者どもは、いちはやく手をかえざるをえない。今度は、ベ、テ、ンとま、や、か、しの手である。

「『日本の情勢について』にかんする所感（「アカハタ」一月十三日）

一九五〇年一月十二日 日本共産党中央委員会政治局

わが政治局は『日本の情勢について』という論文（コミンフォルム機関紙「恒久平和と人民民主主義のために」一九五〇年第一号）を、七日夜のモスクワ放送、ならびに駐日ソヴェト代表部新聞課通信報（一月七日付「プラウダ」紙に転載された記事）によって受取った。この記事は、オブザーバー（解説者）の執筆によるものであることが明記されているが、わが党に影響するところ

ろ甚大であると考えるので、これに関する所見をのべる必要がある。

一、わが政治局はコミンフォルムの光輝ある業績に対して甚大なる敬意をはらう。とくにこの論文によって日本の事態に関心を寄せられたこと(19)を感謝する。今後とも(19)世界人民の革命のために、偉大なる貢献(19)をなされることを期待するもの(19)である。

二、論者が指摘した同志野坂の諸論文は、不十分(19)であり、克服されなければならない諸欠点(19)を有することは明らかである。それらの諸点については、すでに実践において同志野坂等と共に(19)克服されている(19)。そして、現在はその害を十分とりのぞき(19)、わが党は正しく発展をとげている(19)と信ずる(19)。しかしながら(19)、その都度、その都度、中央委員会、その他の権威ある(19)党員会議において、これらの偏向(19)を明らかにし(19)、これを文献的に(19)明確にしておかなかった(19)ことは、党活動にとって欠陥であることを認める。今後こういう弊害(19)がおこらないように、われわれは努めるであらう。

三、日本における客観的ならびに主観的(19)条件は、一定の目的(19)を達成するにあたって、ジグザグの言動(19)をとらなければならない状態におかれている。それ故に(19)、各種の表現(19)が奴隷の言葉(19)をもってあらわされなければならないときもあるし、また迂余曲折した表現(19)を用いなければならないことも存在する。かかる状態(19)を十分に顧慮する(19)ことなくして、外国の諸同志が、わが党ならびに同志の言動(19)を批判するならば、重大なる損害(19)を人民ならびにわが党に及ぼすことは明らか(19)である。

この意味において(19)、この論文は、日本におけるもつとも誠実な(19)人民のための愛国者(19)である共産党が、いかに行動すべきかについて、十分な考慮をはらっていない(19)ことを、きわめて遺憾とする(19)。

党は、同志野坂、その他二、三の活動家の言論(19)が欠陥をもたらした(19)ときには、その時々において克服して正しく発展しているのであって、この論文の評価のように四ヵ年間にわたって誤謬が累積しているように認めているのとは、きわめて異なった印象(19)を大衆はもっている。

それ故に、(19)『野坂の「理論」』は、日本の帝国主義占領者美化の理論であり、アメリカ帝国主義称讃の理論であり、したがってこれは日本の人民大衆をギマンする理論である。野坂の「理論」がマルクス・レーニン主義とは縁もゆかりもないものであることは明らかである。本質上、野坂の「理論」は反民主的な反社会主義的な理論である。それは日本の帝国主義的占領者と日本の独立の敵にとってのみ有利である。したがって野坂の「理論」は、また同時に非愛国的な理論であり、反日本的な理論である。』この結

論は、人民大衆の受け入れ難いものである。(!!)

同志野坂は、もっとも勇敢な人民の愛国者(?)として、大衆(?)の信頼をえている(!!)(傍点、ゴシック体および!!、!?)
—山本)。

読者諸君は、どうかこの「日本共産党中央委員会政治局」の署名入りの「所感」なるものの内容をとくと味読されたい。ここには「日共指導層」が「戦後の初期」から現在にいたるまで一貫して堅持してきているいっさいの「方法」、「活動様式」、「心構え」が、つまり、「日共指導層」のすべてが実にあますところなく、浮き彫りのように示されている。その主なものをつぎに列挙してみよう。

イ 「所感」はまず最初に、当の「論評」の発行元であるコミンフォルムにたいして「甚大な敬意」と「感謝」を表明する。自分たち自身より上位のもの、簡単に刃向かえない権威ある者にたいしては、まず卑屈な「平身低頭」で相手を「もちあげ」ておく、——これは二心ある、陰險な「処世」上手の俗物の必ずつかう手であるが、この「平身低頭のお世辞」は、きまってあとでは、「傲慢不遜の居直り」となるのである。

ロ 「オブザーバー」が徹底的批判を加え、「反民主的、反社会主義的」性質、つまりその完全な反革命的性質を暴露し糾明しているのは、「日共指導層」がずっととってきた「革命理論」であり、「基本方針」である。ところが、「日共指導層」は、これをただの「同志野坂の諸論文」にすりかえ、しかもあきれたことに、「論文の不十分さ、諸欠点、欠陥」の問題にすりかえてしまい、さらに、図々しくも、「それらの諸点はすでに実践において克服され、その害は十分とりのぞかれ、わが党は正しい発展をとげている」といって、「オブザーバー」の批判を「体よくはねつける」ことまでしているのである。

ハ ただし「全面的拒否」という底意をごまかすために、「実践上では克服すみたが、それらの諸欠点を、そのつと、中央委員会や党員会議で明確にして文献的に記録しておくかなかったのは、活動上の欠陥であった」などという、見当はずれの、しかも肝腎の問題を「文献上の記録」の問題にすりかえ、という、まったく悪質な「申し開き」を並べたてる。

二 「諸論文の諸欠点」と自身で言っておきながら、すぐあとでは問題を「論文における表現の適不適」にすりかえておき、しかも、「奴隷の言葉をつかわなければならない事情もあるのに、この点を十分に考慮しないで、わが党ならびに同志の言動を批判するのは全く不当である」という、まさに「居直り」的言辞を弄する。

ホ 「日共指導層」は、さらに右の「居直り」からすすんで、「オブザーバー」への反駁と論難に転じて、「野坂その他の言論の欠陥は、すでにその時々で完全に克服してしまい、現在党は完全に正しく発展しているのだ。それは、すでに過去の一時的な誤謬なのだ」と主張し、「その証拠には、わが国の大衆の印象がそれを示している」という。「大衆の印象」などをもつてきて自分たちの「正当性」を証明しようなどとするのは、まったく墮落したブルジョア的煽動政治屋にも劣る手合だけである。

ヘ こうして最後にいたって、「オブザーバー」の批判をば、「この結論は人民大衆の受入れがたいものだ」というように、「人民大衆」をだしにして、全面的にけとばしてしまっている。最初の「文句なしの低姿勢、敬意と感謝の表明」にはじまって、すりかえ、ベテン、逃げ口上をあれこれ並べて、しだいに尻あがりに、「居直り」をつよめていき、最後には「きっぱりと体よく」相手方の批判をはねつけ、自分たちは現在完全に無謬で「大衆の信頼をえているのだ」と大見得をきる、——これは、もっとも醜惡な、二心ある、俗物的修正主義者の「最上の知慧」を示したものであり、まさに「日共指導層」のすばらしい本領発揮の模範というべきものである。

ト　だが、「所感」が示している決定的に重要な意味は、そこにあるのではない。もっとも重大なことは、「日共指導層」には、その骨の髄まで「大衆蔑視」と「大衆引き回し主義」がしみこんでいるという事実である。右のあきれるようなすりかえ、ペテン、まやかしが「外国の諸党」とくに一目も二目もおかざるをえないソ連共産党指導部と中共指導部にたいして、「通用」するとは、狡智にたけた俗物的修正主義者のことであるから、思っていないはずである。だがそれでも「止むをえない」し、またいっこうに「かまわない」。日本の「大衆」をさえしつかり握って完全に「自家薬籠中のもの」にしておけば、かれらの地位は安泰なのである。「外国の諸党」とは、「意見の相違」でおしきることも、ばあいによつては「尻をまくる」ことも、できる。日本の「大衆」には、すりかえ、ペテン、まやかしなどわかるうはずはないし、気がついて「文句をいう」やつには、「規律違反」による「処分」という手がいくらでもつかえる。「大衆」は、「共産党」という輝かしい名前には、そして「共産党指導部」というものの「権威」には、一も二もなく頭を下げ、追隨するものだ。——これこそ、このおどろくべき「大衆蔑視」と「大衆引き回し主義」こそ、「所感」の底を流れる「背骨^{バックボーン}」なのである。

さて、以上のようにして、すりかえ、ペテン、逃げ口上からだんだん「居直り」をつよめ、日本の「大衆」を前にして、「共産党指導者」らしく、まんまと大見得をきったまではよかったのであるが、まことにお気の毒にも、この「大見得」はわずか五日かぎりで、たちまち「面目丸つぶれ」にとつてかわられることになるのである。自分たちの思いのままに動く、忠実な「大衆」を前にして「外国の批判」をはねつけて自己の「絶対無謬性」を誇示し、このすばらしい「日共指導層」の下に「議会的平和の途」をすすむべきだと大見得をきっているその足許をつきくずしたのは、一月十七日付北京人民日報に発表された社説——『日本人民解放の途』である。そこで、その中のおとくに重要な論

点だけをぬいてかかげてみよう（……は、引用を省略した部分をしめす）。

（6）今も当時とまったくかわらない根性と品性の「日共指導層」が、『四・二九論文』の筆者である和製「評論員」の口をかりて、これらの「批判」を指して「わが党の内部問題への外国の諸党の介入」だとか、「外国の諸党の大国主義的なおしつけ」だとかいって、精いっぱいこきおろさずにはいられないという気持は、これによってもよくわかるのである。「救世主」として「大衆」の絶対的信服をまんまとものにしていた世紀的ペテン師がその化けの皮をはがされたのである。どうしてその恨みが骨身にしみないでおられようか！

「日本帝国主義は過去において中国人民の敵であつたし、現在もなお敵であるが、日本人民は中国人民の友人である。日本と中国の両国人民は、共通の敵、すなわち日本帝国主義とその支持者である米帝国主義とをもっている。またこの両国人民は共通の友人をもっている。共通の友人とは社会主義ソ同盟、人民民主主義諸国、さらにまた帝国主義にたいして闘っている世界のプロレタリアートと抑圧されている人民である。中国人民は日本人民の解放に大きな関心をよせている。

日本人民の解放のための闘いは、現在複雑な、また困難な情勢の下におこなわれている。⁽⁷⁾米帝国主義占領当局は、西ドイツと同様に、日本をもまた民主主義と社会主義とに敵対する、そして新しい戦争計画のための拠点たらしめつつある。米占領当局は、この反革命的目的のために、日本帝国主義の勢力を維持し、日本人民の基本的権利に攻撃を加え、日本を植民地に押しさげようとしている。日本人民は、こうした状態の下で米帝国主義と日本の反動勢力にたいし、断固として革命的闘争を実行せねばならない。日本の人民はそうすることによってはじめて、アメリカの占領と反動の支配とを早期に終結せしめ、民主主義的日本を建設することができるのである。

日本の革命的人民の前衛である日本共産党は、人民に革命的⁽⁸⁾精神を教え、これを団結させ、一步一步革命的⁽⁸⁾たらしめねばならない。こうしてはじめてアメリカの占領と反動の支配とを終了させ、民主主義日本を建設するという目的を實際に達成しうる。これには近道はない。しかし日本共産党の指導者の一人野坂参三の執筆した二、三のテーゼ（一九四九年に執筆されたものもふくんでいる）、を読んでみると、これらのテーゼが致命的な原則上のあやまりをふくんでいると判断しないわけにはいかない。野坂参三は、日本人民にたいし、日本の人民はブルジョア議會を利用して平和的手段で国家権力を握りうるのと、またこのかれの判断が日本の現状下で可能であることを証明しようとして一生懸命に努力した。

この見解がまったく誤っていることは明白である。こういう宣伝をやることによって、日本の人民とその前衛のあいだに、イデオロギイの上では混乱をもたらし、行動の上では何をなすべきかを見失わせ、日本共産党の革命的宣伝を弱体化させたのである……。これは必然的に日本の人民を危険におとし入れ、敵の手にこれをゆだねるものである。それゆえにわれわれは、共産党労働者党情報局の機関紙『恒久平和と人民民主主義のために』一月六日号に発表された『日本の情勢について』という論文を読んだが、われわれは、この論文こそ日本におけるわれわれの同志にたいし、誤謬を厳密に検討し、それを矯正する機会をあたえるものであると信ずる。

……しかしながらまた各外国通信社の報道によれば、日本共産党政治局は一月十二日、野坂のおかした誤りは『すでに克服されており』共産党労働者党機関紙の批判は、日本共産党の立場を『十分に考慮』していないとして、この批判的論文に同意しない旨を表明した声明を発表している。もしこれが真実であるならば、日本共産党政治局の見解と態度が間違っており、妥当でないことはきわめて明らかである。われわれはこれを遺憾とすること大なるものがある。近く開かれることになっている日本共産党中央委員会総会が、この問題を正しく理解し、この態度を改め、野坂の誤りを正すために適当な措置をとることを希望する。……しかし野坂の誤りは簡単にたすことができる単純なまたは一時的なものではないことを心得なくてはならない。いかなるブルジョア支配下にあつても、ましてや米帝国主義の支配下にある現在の日本では、国家権力獲得のための労働者の闘争は、はげしい革命的闘争以外にはありえない。議会は、たんにこの闘争における補足的手段、つまり敵を暴露する演壇としてつかうことができるだけである。

この基本的なマルクス・レーニン主義者の立場は、ある種の便宜的な戦術をつかうことによって敵を誤らす目的のために変更されてはならない。日本の共産主義者が現在重大な状態におかれていることはたしかである（そして野坂テーゼは、まさにこの重大な事実を過小評価し、見のがし、美化している）。重大な状態におかれていることに気づいたボルシェヴィキの共産主義者は、戦術面においては十分に柔軟性をもたねばならないが、しかしこのために原則上の諸問題について基本的な立場をゆるめてはならない。⁽⁹⁾ 反対にかれらは、このような重大な状態において、原則についてしっかりと立場をとり、試練にたえ、それによって人民の信頼をかちえねばならない。もしこの原則的な立場を失うならば、いわゆる敵をあやまらせようとする試みは、反対に人民大衆をあやまらせることとなるだろう。

労働者階級の革命的な政党も、またその指導者も、けっして誤りをおかすことがないと保証することはできない。万一誤りをお

かした場合には、この政党とその指導者は誤りを指摘された場合に、その誤りを固執しない。もし政党と指導者が誤りを急速に、しかも謙虚に訂正するならば、政党とその指導者は人民に忠実であることを証明し、その後もいぜんとして人民の間に威信を保つてあろう。さもなければ威信は全く維持することができず、しかもそのような威信は価値のないものとなる。このような通則は、中国の革命運動をふくむ国際労働者階級の革命運動でなんども証明されてきた。……………われわれは、同志的な立場から、日本共産党が同様な勇氣をもってコミンフォルムの批判を受け入れ、野坂氏の誤謬をただすことを心から望んでいる。……………

われわれは日本共産党が革命の正しい線にそって前進し、障害を克服することに努力することを希望する。われわれは日本人の解放が革命の正しい道にそって進展し、最後の勝利を得ることを希望する」(傍点およびゴシック体―山本)。

(7) この「現在複雑な、また困難な情勢の下におこなわれている」という「懇切な」指摘は、たちまち、二心ある、陰險な俗物的修正主義者たちの「目のつける」ところとなつて、「当時の内外情勢の特殊性」(第十八回拡大中央委員会)とか、「日本のような複雑な事情のあるところ」(野坂氏の自己批判)とか並べたてて、「だから、誤りをおかしたのも、当時としては無理からぬことだ」というように、さもしい弁解の口実につくりかえられているのである。

(8) この明白な「テーゼが致命的な原則上の誤りをおかしている」という文字に注意されたい。この「テーゼ」という言葉は、いうまでもなく、問題がたんに野坂氏の個々の論文の誤りにあるのではなくて、「日共指導層」全体の「根本方針」そのものが致命的な原則上の誤りをおかしていることを明示しているのである。

(9) 「野坂の誤り」『日共指導層』の「致命的な原則上の誤り」が、「簡単にただすことのできるような単純なもの、一時的なものと考えてはならぬ」というこの指摘は、きわめて適切なものである。「無理論、無能」でありながら「共産党指導部」というまたとえがたい地位にしがみついて「大衆引き回し」ばかり策するこの俗物的日和見主義者の修正主義的本性は、「戦後の初期」から現在にいたるまで一貫して保たれており、とうていいたすことのできるようなものではないのである。

(10) マルクス・レーニン主義の革命的基本的原則の立場はしっかり堅持すべきだという、この当然の指摘は、すぐあとで示されるように、「日共指導層」にとつて、最後まで「通じない言葉」であつたし、現在もそうなのである。

(11) このくだりは、レーニンが論文『共産主義内の「左翼主義」小児病』の中で「政党が自分のおかした誤りにたいしてとるべき態度」を懇切に説明している個所(全集第四版、第三十一巻、三九ページ、本誌第二十一巻第一号、二七ページ参照)と趣旨のことを述べたものであるが、このレーニンの懇切な教示は、二心ある、裏切적인俗物的修正主義者たちの目をつけ

るところとなつて、「日共指導層」がいつでも重大な誤りや裏切りをおかした場合には、必ずといってよいほど、あとでこの教示の文句を「お説教」として並べ、おざなりの「自己批判」でごまかしてしまふことになつてゐるのである。

ごらんのように、「人民日報」社説の論調は、きわめて懇切なもので、同志的、説得的であり、しかも原則にかんしてはきわめて厳格な、妥協を許さないものであつて、まことに友党の勧告としては一点の非のうちどころもないものといえる。さきにはコミンフォルムの批判があり、いままた中共指導部の「駄目おし」的勧告に接しては、さすがの二心ある、俗物的修正主義者たちも、「かぶとをぬがざるをえない」羽目におちいる。「言い逃れ」や「居直り」が絶対に通用しないいま、打つ手は、コミンフォルムの批判をそのまま受け容れる以外にはありえない。そこで「日共指導層」は、一月十九日、第十八回拡大中央委員会を開いて、つぎのような「決議」を出して、これでさつさと「ケリをつける」ことにしたのである。

(12) ただ一言つけくわえれば、「社会主義ソ同盟」を「共通の友人」に加えたのは、当時のことであつて、今日では、周知のように、「ソ連修正主義指導部」は「社会帝国主義者」として、「共通の敵」の中に入つてゐるのである。

「コミンフォルム機関紙の論評にかんする決議」

コミンフォルム機関紙の『論評』にかんする政治局の『所感』について、拡大中央委員会は討議をつくした結果(!!)、次の結論に達した。

コミンフォルム機関紙の論評の積極的意義(!!)について、中央委員会は意見が一致した(!!)。

次に、同志野坂参三の次の自己批判を認める。
『コミンフォルム評論家の指摘した私の諸論文(!!)にあらわれた「理論(!!)は、当時の内外情勢の特殊性はあつた(!!)が、原則的に誤謬である。その後(!!)、これが誤りであることを知つて(!!)、克服に努め(!!)ながら、しかも、公然と明白に清算(!!)せず、また、その後においても、主観的意図(!!)のいかんにかかわらず、これに類する見解(!!)を、断片的に(!!)発

表したことは誤りである。そこで今後こうした誤謬をおかさないように、そして国際プロレタリアートの期待に酬いる(?)ことに努力する(!!) (傍点および(!!)、(?)―山本)。

読者諸君、なんとこれがコミンフォルムの「論評」と中共指導部の切なる勧告にたいする「日共指導層」の「答え」の全部である！これが、『党攪乱のデマをうち砕け』と『日本の情勢について』に関する所感』につづいて、「日共拡大中央委員会」全員が「討議をつくし」てつくりあげた「結論」である！なんという、あきれかえった「答え」、「結論」であろうか!! すりかえとペテン、まやかしをつかつて「逃げ口上」から「居直る」という手が全然駄目とわかると、この連中の考えだす手は、その下劣な品性にふさわしく、「面従腹背」的ごまかしでいちはやく「その場をしのぐ」ことだけである。

第一に、「論評」の内容を真剣に検討してそこから緊要な教訓をくみとり、「日共指導層」全体の「根本方針」から「日常活動」にいたるまで徹底的に再検討し、自己批判をやりとげるといふことは、全然考えもしないし、やる手数もかけない。ただ「論評は積極的意義をもつものだ」という「一致した」(!!)意見を並べるだけで事をすましていく。これでは「御意見はごもっともで、まことに結構です」というのとまったく同じである。これほど、友党を愚弄し踏みつけにしたやり方が、またとあるだろうか!! なんという恥し恥ずかしい、裏切りの俗物の手合であろうか!! しかも、あきれたことに、拡大中央委員会全員が「これで十分だ、あとは野坂氏が自己批判したことを認めることで、めでたくケリ」という考えに、一人残らず賛成したのである！自分たち自身の地位と「威信」をつなぐためにはどんな下劣なことも平気でやつのけるという、この腐りきった俗物的「指導層」！

第二に、「日共指導層」は、「全責任」を「野坂氏の諸論文の中の誤り」におしつけてしまう。そして、野坂氏が

その誤りを認めた「自己批判」を公表したという「事実」を公表することで、野坂氏も「日共指導層」全員も完全に欠陥を克服してしまった、もはや「完全無欠」だ、ということにしてしまおう。なんのことはない、「私がまちがっていたのです。ハイ、まちがいはもうすっかり改めました」というのと、まったく同じである。これは、狡猾で卑屈きわる「居直り」でしかない。

第三に、ここでの野坂氏の「自己批判」の内容は、まさに「いいのがれ、まやかし、居直り」の典型である。まず、「日共指導層」全体の「根本方針」と「日常活動」全部にかかわる「原則的問題」をば、「私の諸論文にあらわれた『理論』」などという、ほんの局部的言辭の問題にすりかえる。つぎに、「当時の内外情勢の特殊性」という文字を盗用して、「だから無理からぬことだ」という印象をつよめる。さらに、「その後、これが誤りであることを知った」というのも、「克服に努め」たというのも、みな真つ赤なウソである。これらのことは、すぐあとで引用する野坂氏の『私の自己批判』の内容を一見すれば、明白である。また、これに加えて「主観的意図のいかんにかかわらず」という文句をそえて、いかにも野坂氏が「誤りであることを知って、克服に努めた」という体裁をつくろうとしているのも、まことに見苦しい。しかも、「これに類する見解を、断片的に発表した」などという言辭を弄している。「断片的」どころか、野坂氏の言動全部を通じて、いや、「日共指導層」全体のいっさいの言動を通じて、「原則的誤謬」は一貫して流れており、むしろ「日共指導層」全員の骨身にこの「原則的誤謬」はしみこんでいるのだ。こうした反革命的原則的誤謬をおかしながら、——それになりたいしてなんらかの責任を負って処置することは、全然考えることすらせず——真剣な自己批判を理論的・実践的になしとげて大衆の信頼をかちとることなど全然しようともしないで、「共産党指導部」という地位にしがみついていた、「国際プロレタリアートの期待に酬いることのできる」地位にいたいと公言してはばか

らないとは、なんと醜惡なエセ「指導層」であろうか!!

五

そこで、つぎに、右の第十八回拡大中央委員会が開かれたときから半月後に、野坂氏自身が発表した論文、『私の自己批判』（一九五〇年二月六日）の内容を簡単にみてみよう。われわれは、野坂氏が戦後の初期から一貫して日共指導層の中のものともすぐれた理論的指導者であり、徳田書記長なきあと、ずっと党「第一書記」として、現在、はまた宮本顕治書記長と並んで「中央委員会議長」の要職にあつて、名実ともに「日本共産党」をリードしてきているという事実を念頭におくとき、この「自己批判書」の内容を正確に吟味しておくことは、きわめて緊切かつ適切なものがあると考えるのである。この「自己批判書」は、簡単な「まえおき」と「むすび」とのあいだにおかれた「一、何を書いたか、二、当時の客観的事情、三、いかなる誤りがあつたか、四、どこに誤りの根源があるか、五、結語」という、五つの節から成りたつていて、いかにも「理論的最高指導者」にふさわしい体裁を装っているが、しかし、その中味は、「理論的」というにはほど遠く、さきの「所感」および「決議」とまったく同じ性質のものでしかない。まず、その「まえおき」から要点をみていこう（……は中略を示す）。

「第十八回拡大中央委員会では、徳田書記長の一般報告が、当面における党の基本方針として決議された。また、その討議の中で、コミンフォルム機関紙に『評論家』（オブザーバー）の署名で書かれた『日本の情勢について』と題する評論と、そこで批判された私の『理論』とが、重要な議題とされ、これについての中央委員会の決議もおこなわれた。私は、右の二つの決議に賛成して、その実行をちかづけた。

この中央委員会でおこなわれた各地の同志の発言や、当時（!?）発表された『北京人民日報』に載せられた社説『日本人民解放

の途」から、私は多くのものを学んだ(!!)。そして、私の自己批判を思いきつておこなう機会をえた(!!)。

過去四年半の私の論文や演説を全面的に検討することが必要ではあるが、それは他日にゆずることにして(!!)、とりあえず(!!)、中央委員会でおこなった私の発言を骨子として、『評論家』の指摘した諸問題に重点をおいて(!!)、一応の(!!)自己批判をつぎに発表することにした。これは、全共産黨員ならびに私を支持してくれた人々(!!)にたいする私の義務(!!)である。

この自己批判は、中央委員会終了後ただちに発表する予定(!!)であったが、いそいで(!!)私の国会演説を準備する必要があるので、予定よりもおくれたのである(!!)。(傍点、ゴシック体および(!!)、(!!)——山本)。

この「まえおき」を読んだだけで、野坂氏の「自己批判書」を貫ぬく考え方が、さきの「決議」と完全に同一のものであることがよくわかる。

第一に、「オブザーバー」によって批判されたのは「私の理論」だというようにして、「日共指導層」全体の「根本方針」と「全活動」にかかわる原則的問題だということを意識的にはぐらかすことをしている。

第二に、さきの「決議」を全面的に支持している。

第三に、『決議』に賛成してその実行をちかう」ことで、「ケリ」をつけ、なんらの責任もとろうとしていない。

第四に、「社説『日本人民解放の途』から、私は多くのものを学んだ」というのは、二重の意味でまやかしいである。ひとつには、さきに見たように、「決議」にしてからが、「面従腹背」のごまかしでケリをつけようとしていて、なにひとつ学ばないばかりか、これを体よく「棚あげ」しようとしている。そして、もう一面からいえば、「多くのものを学んだ」かどうかは時間をかけなければわからないことであり、また、こういうことを本人自身が「まだよく学びもしないさきから」その口で言いたてるなどということは、真面目なマルクス・レーニン主義者にとうていできることではない。それは「大衆引き回し」が身にしみついた二心ある、裏切りの俗物修正主義者だけができることである。

第五に、「過去四年半の私の論文や演説を全面的に検討すること」は、「日共指導層」の「根本方針」および「活動全体」を「全面的に検討する」ということであり、一日もゆるがせにできるものではない。寢食をひかえても一刻も早く「全面的、徹底的な検討」を加え、その反革命的な「帝國主義の美化と支持」の「方針と活動」を根本的にきりかえなければならぬし、それでこそ、日本の勤労人民に「顔向け」ができるというものである。ところが、あきれたことに、「検討は他日にゆずることにして」などと平氣な顔で述べたて、しかも、「第十八回拡大中央委員会」の席上で話した「一応の、おざなりの自己批判」さえ、「中央委員会終了後ただちに發表する」のを半月もおくらせ、「私の国会演説を準備する」ほうを優先させているのである。これまでの「国会活動方針」そのものが批判の対象になっているというのに、その「反革命的議會主義の立場にもとづく国会活動」を優先させるとは、なんという、「友党の批判と勧告」と、そして「日本の勤労人民」とをふみつけにしたやり方であろうか！ しかも、驚嘆させられるのは、ここで体裁上「全面的な徹底的な検討が必要だが、他日にゆずることにした」と広言しながら、それ以後今日にいたるまで、「全面的、徹底的な検討」はおろか、「一通りの検討も自己批判も」なにひとつ、全然やっていないという、その徹底した鉄面皮、人民蔑視と友党愚弄である。

右にあげたような独特の「品性發露」は、つぎにみられるように本文全体を通じて一貫しているものである。

まず「一、何を書いたか」で、野坂氏は、「コミンフォルム機関紙の『評論家』は、私が一九四六年五月に書いた論文（毎日新聞所載）を主たる問題にしている。この論文は、……」というようにして、問題の範圍を「毎日新聞」に載せた一論文にいちはやくせばめてしまう。これは、この上もなく悪質なすりかえであり、下劣な策略である。野坂氏はじめ「日共指導層」全員は、この論文と同じ考え方、同じ主張をその「根本方針」とし、これまでずっと宣伝してきたではない

か！ その動かない証拠を一つだけお目にかけよう。一九四六年二月の第五回党大会で採択された「大会宣言」の冒頭におかれた文章は、「日本共産党は、現在進行しつつある、わが国のブルジョア民主主義革命を、平和的かつ民主主義的方法によつて完成することを当面の基本目標とする」（傍点およびゴシック体―山本）となつてゐる。そして「大会宣言」のもつとも主要な起草者である野坂氏は、この大会でとくに「大会宣言について」という報告をおこない、「大会宣言」の「正当化」をおこなつてゐるのであるが、その中で、「世界に大きな激変をきたし、新しい情勢が生れたので、新しい戦術をうみ出す必要がある」と強調し、「一番の中心問題は、暴力革命をわれわれはさけるということである」と述べ、さらに、「マッカーサーの指令によつて日本独占資本の機構が解体されようとしており、戦前とくらべられない弱い力になった」等々の「条件の変化」を数えたてて、「すなわち、この宣言にあるように、平和的・民主的な方法によつて民主主義革命をやつて、さらに社会主義革命の方向にこれをもつてゆく。民主主義的な方法とは、議会的な方法によつてわれわれは政權を獲得しさらに社会主義の方向に政權をもつてゆく、これができる可能性が生れたのである」（傍点およびゴシック体―山本）と力説してゐるのである。

「大会宣言」をブルジョア新聞所載の片々たる一論文にすりかへるとは、なんと世紀的なペテン師ではあるまいか！

右の論文について、野坂氏は、それが「新しい内外の情勢について六つの特徴⁽¹³⁾」をあげて「日本に、平和的、民主的方法によつて、民主主義革命が達成される可能性があるという結論を出している」のがその「骨子」だと述べ、つぎのような主張をかかげる、――「右の結論を、つきつめていえば、占領下においても、主として議會を通じて、人民政權の樹立が可能であるということになる。これが今日の状態からみれば、原則的に誤つてゐることは、容易にわかる」（傍点およびゴシック体―山本）。

(13) この「六つの特徴」のうち、今日との関係でとくに重要な意味をもつものと思われる(一)と(三)をあげておこう。

(一) 日本の支配階級の武装が解除されたこと。連合国軍が進駐しているが、ポツダム宣言の遵守によつて、日本に民主的政府が

作られたのち、可及的速かに撤兵するであらうこと。」

「(三) 日本の民主化の發展、新憲法草案と国会の民主化。国会内外の闘争にもとづく民主的方法による權力獲得の可能性。」

野坂氏のこの断固たる主張を、読者諸君はどうか——「六つの特徴」のうちの(一)および(三)とあわせて——記憶にとどめておかれたい。そこで、つづく「三」、「四」、「五」の中で注目すべき個所を抜き出して、簡単な注記をつけることにしよう(傍点、ゴシック体および(!!)、(??)は山本のもの)。

「三、いかなる誤りがあったか」の中から。——「(三) 權力の問題について、國際独占資本が、国内の全分野を支配しつつあることを明らかにして、ここに一切を集中しなければならぬこと、すなわち、民族独立が戦略的な基本的任務であることを、十分明確に示なかった(!!)」。また、革命は權力の問題であつて、權力は階級的であるとともに、武力によって裏付けられていることを強調しないで、これとの闘争が、いつでも平和的手段でこないような見解をもつた。⁽¹⁴⁾

(四) 以上の点から、国会を通じて、政權を握りうる可能性を強調した。しかし、この場合にも、私は、社会民主主義的な議會主義(!!)を主張したのではない。……しかし『国会を通じて政權に近づく』という考え方は、權力や国会に対するマルクス・レーニン主義的な原則からの逸脱であつて、本質において、(??)社会民主主義への偏向であるといえる。⁽¹⁵⁾

もう一つ重要なことは、今日の日本の国会は、東ヨーロッパの人民民主主義国の国会やフランス、イタリアの国会とちがった性格をもち、一種の從属国における国会の性格をもっている。したがつて、これに対する共産党の根本的態度も、上記の国々の国会に対する態度とは違わなければならない。この点が従来から明確を欠いていた。ここからも、社会民主主義的偏向が生れた。

(四) 私の重大な誤りの一つは、私に十分や欠陥や誤りがあつた場合に、ただちにこれを公然と、大胆に、明確に清算し(!!)ないでズルズルベッタリになつていた点にある。これは党全体にとつてもいえる(??)。

「四、どこに誤りの根源があるか」の中から。——「(一) その根源は、目前の戦術のために、マルクス・レーニン主義的、原則を輕規、または無視(!!)した点にある。」

(二) また、私の考えの中には折衷主義的なものがあつた。私の書いたものどこを見ても、純粹に(!!)社会民主主義的なものはない。たとえば『平和革命』の問題にしても『平和的手段による人民政權樹立の可能性』があるというだけ(!!)で、常に国会を通じて社会主義政權を樹立しようと主張する社会民主主義理論とは異なっている。しかし、戦後の事態が実証するように、日本

の今の状態のもとでは、このような可能性はありえない。したがって(!!)、私の考えは、共産主義と社会民主主義との折衷的なものとなり、本質的には社会民主主義的偏向である。⁽¹⁷⁾

(三) 次に理論的修養(!!)と理論的厳格さが足りなかった。そして理論の俗流化がおこなわれた。⁽¹⁸⁾

(四) 徹底的な自己批判をおこなうことを妨害したのは、小ブルジョア的『面子』または名譽心である。たとえば『評論家』の論文を最初に読んだ時、野坂『理論』は『帝國主義占領者美化の理論……』の不当な字句⁽¹⁹⁾を見て、私は激怒した。しかし、静かに考えてみると、私の理論には大なり小なり⁽¹⁹⁾偏向⁽²⁰⁾がある。しかし、その時、ただちに、これを率直に認めることはできなかった。私にはいろいろの言い分⁽¹⁹⁾があるし、また、私ひとりの責任ではない^(!!)という弁解もあった。しかも、政治局の『所感』のなかには、私の『不十分と欠陥』が指摘してあるだけで『誤謬』とは書いてない。これに『誤謬』を加えることを私はちゅう躇した。しかし中央委員会の席上では^(!!)、私は一切を清算する^(!!)ことを決意した。そして、私は公然と誤りを認めた^(!!)のである」

「五、結語」の中から。——「要するに、私の『理論』は、右翼日和見主義的の傾向をもったことができる⁽¹⁹⁾。しかし私の偏向^(!!)は、他の同志によって修正されて⁽¹⁹⁾、党は、不十分と欠陥はあつたが^(!!)、大体において^(!!)、基本的には^(!!)正しい方針⁽¹⁹⁾をもって進んできた⁽²¹⁾。それにもかかわらず⁽¹⁹⁾、私の偏向が、日本共産党の今日までの活動の上に、直接または間接に、大なり小なり、悪い影響をあたえた^(!!)ことは、否定できないところである。これに対して、私は十分の責任を感ずるものである。……」

以上のような、私をあやまらせ⁽¹⁹⁾、また、党に害をあたえた⁽¹⁹⁾私の誤謬に対する自己批判は、私自身を教育し^(!!)、訓練する^(!!)のみならず、党をも^(!!)教育し訓練し^(!!)、苛烈な実践^(!!)のなかで、本当の指導者^(!!)を育てあげる^(!!)ことに貢献することを、私は衷心より期待するものである。そしてわれわれは、国際的革命運動の一翼である日本共産党に課せられた重大な任務をはたさなければならない。」

(14) 「権力が階級的であり武力により裏付けられていて、これとの闘争がいつでも平和的手段でおこなえると考えるのは、根本的誤謬だ」とここでは明記されているが、この「いつでも」という文句の使い方は、レーニンのそれとは全然ちがって、きわめて意図的なものである。マルクス・レーニン主義の革命的基本的原則は、「武力により裏付けされている階級的権力は、つねに、平和的手段ではなく、強力的手段によって打ちたたおさなければならぬ」ということを明確にしているのであるが、「日

共指導層」の二心ある陰險な「語法」にしたがえば、これは、「いつでも平和的手段で考えるのはまちがいだ、条件しだい
で強力的手段によらねばならないこともある」というように、ねじまげられ、改ざんされてしまうのである。その「条件の
化」に役立たせられるのが、「占領下」という言葉であって、「全面的占領」から「半占領状態」へ変ったから、「平和的
手段でおこないうる可能性が生れた」というのが、現「日共指導層」と和製「評論員」の、予定の口上なのである。だが、お
気の毒にも、この口上は、下記の注(16)でみられるように、「一種の従属国における国会の性格」という野坂氏自身のりっ
ばな言葉と直接に矛盾するものである。

(15) 野坂氏は、いたるところで、「自分は社会民主主義的な偏向をおかしたただけだ」ということをくりかえし主張し、これを
裏付けるような説明をあれこれけんめいに並べたてているが、これはきわめて陰險なごまかし、「オプザーバー」の「論評」の
はぐらかし、悪質なまやかしである。「論評」は、なんといっているか、忘れたのか!? 「野坂の『理論』は、日本の帝国主
義占領者美化の理論、アメリカ帝国主義称讃の理論、日本の人民を偽瞞する理論で、マルクス・レーニン主義とは縁もゆかり
もないもの、反民主的・反社会主義的・反革命的な理論だ」という明確な指摘を、野坂氏自身「激怒した」と称している当の
言葉を、いったい、忘れたというのか? この批判にたいし、「社会民主主義的な偏向だ」と答えるということは、「公然と
誤りを認めない」こと、「論評」を体よくはぐらかすことである。

(16) 和製「評論員」は、「人民戦争は、植民地従属国の解放の基本的な道」としてのみ認められうるものだととして、日本は
「植民地従属国」ではないからあてはまらないのだ、という論法を弄している。そして、サンフランシスコ条約締結によって
公然とした占領から「半占領状態」に変わったということその理由にもってきている。こういう論者は、「植民地従属国」の
「実質」と「形式」との区別が全くわからないこと、「新植民地主義」という大切な言葉があることをすこしも御存じないこ
とを、自分でさらけだしているものである。いったい、「半占領」ということは「半強力による従属」ということなのか、そ
れとも、「強力ぬきの、相談づくの従属」ということなのか? 世にも有名な「半封建」という言葉の使い方でも、もうい
ちどよくおさらいしてから、出直すがいい。

(17) 「共産主義と社会民主主義との折衷的なもの」という、得^{エグ}体の知れない、ありうべからざるものを「創作」する野坂氏の
非凡な才能をよく吟味されたい。こういう言葉をつくりだすことができるのは、無理論で「大衆引き回し」を事とする醜惡な、
二心ある、俗物修正主義者だけである。「共産主義」に「社会民主主義」を足して二で割れば、出てくるのは「社会民主主

的偏向」である、——なんと、すばらしい反マルクス・レーニン主義的改ざん者の「数学的」演技であらうか!!

(18) 「理論的修養と理論的厳格さ」というこの言葉は、有名な「中国のフルシチョフ」劉少奇の『共產黨員の修養について』を連想させずにはおかない。事は、「本性」と「品性」の問題であって、「修養」の問題などではないのだ。

(19) この「不当な字句」という文字ひとつだけが、野坂氏の「率直な」言葉のようである。つまり、氏にとって「自己批判」すべきものは、最後まで、「大なり小なり」の、本質的でない、偏向だけなのである。

(20) 「右翼日和見主義的・本質的傾向」は、「戦後の初期」から一貫しており、しかも「日共指導層」全員と党全体によって拡大され、強められてきていたものである。これを「私の一特定の、部分的な『理論』」の「偏向」にすりかえることで、「いっさいを清算し、ケリをつける」ことは、反マルクス・レーニン主義者であることを表白するものである。だが、それに

しても、「右翼日和見主義的傾向の誤謬をおかしてきた」ことを「公然と認めた」ことは、きわめて貴重な告白といってしかるべきである。この「公表」は、榊氏の常套手段である「わが党はつねに一貫して右と左の日和見主義とたたかってきた」という「権威的」だぼらのまやかしぶりをすっかり「公然と」明るみに出してしまっているからである。

(21) 「誤りは、私の『理論』の偏向だけであって、その偏向も、とくに他の同志によってただされて、党は基本的には正しい方針をもって進んできているのだ」というこの「結語」ほど、野坂氏の「面従腹背」の本領をさらけだしているものはない。

「論評」と「社説」は、野坂氏個人ばかりでなく、「日共指導層」全員、したがって党全体が「大なり小なり」反革命的・反社会主義的「方針と理論」にとらわれていたと批判しているのだ。なんという醜惡な、すりかえ、まやかしであろうか!

野坂氏の「自己批判書」を通して驚嘆させられるのは、やはり、それがさきの「所感」とほとんど同じ考え方を守りつづけていること、つまり、このように「自己批判書」を書き「公然と誤りを認め」さえすればそれで「責任を果たした」ことになり、「いっさいのケリがつく」いっさいを清算することができる「それで」りっぱに指導者の地位をたもつことができるし、指導者に課せられた重大な任務も首尾よくはたしていることになる」という「基本的考え方」を、堅持しているということである。つまり、「日共指導層」にとっては、「自己批判書」なるものは、つねに「自分よりすぐれた権威をもった者」の「批判」に当面してよぎなく公表するところの「免罪符」なのである。それ

を「日本の勤労人民」の前に公表せざるをえないという点がかれらの「面子」と「地位保全」に「大なり小なり」影響をあたえるために、「大国主義的なおしつけ」と感じ「激怒」におちいるのがつねであるが、しかしまた、かれらがその本領を発揮して、この「自己批判書」をば「免罪符」につくりかえるばかりでなく、さらにすすんで、かれらの「地位確保」と「威信増大」のためのりっぱな「保証書」に仕立てあげるのもつねなのである。

(22) この「自己批判書」は、「日共指導層」が「自分よりもすぐれて權威をもち、抑えつけることのとうていできない者」にたいしてよぎなく出すものに限られる。「日共指導層」はまた、個々の黨員にたいして、「指導層」とすこしでも意見ががっているときには、「査問」と「処分」という「おどし」をつかつて、容赦なく「自己批判」を強要するが、これもまた、別の意味で「日共指導層」の「地位確保」と「威信増大」のための不可欠の手段となっている。別の意味でというのは、つねに左か右かの日和見主義的誤謬と偏向を「大なり小なり」おかしているかれら「指導者」にとつて、その誤謬なり偏向をあばきだす「要素」が党内に存在することは、「容易ならぬ事態」を生みだす恐れが多分にあるからである。だからこの場合、個々の黨員を「規律違反」などでむりやり「自己批判」させるのは、「日共指導層」への絶対服従の「誓約書」を取立てるといふことなのである。この後者の「自己批判」は、さきの「所感」をめぐって「日共指導層」自身が分裂してとめどもない論争と闘争によって混乱がつづいているときに、「正統派」的指導層により「地位確保」のための最も強力な手段として、実に精力的に「活用」されたものである。

なお、「外国の諸党」の「論評」および「社説」を「日共指導層」がどのように受けとったかということを示すために、野坂氏の「自己批判書」のほかに、宮本顕治および椎野悦郎両氏の論文からの抜粋をつぎにあげておこう。一九五〇年六月の「レッド・パージ」以後の「日共指導層」の「分解と対立・抗争」の中で、椎野氏は、徳田書記長を擁する臨時中央指導部の議長として志賀、宮本両氏および袴田氏らを「分派主義」者として攻撃し、「平和革命」を否定する「新綱領」を決定したが、のち六全協をへて「統一」された「日共指導層」は、野坂氏を中央委員会第一書記に、志賀、宮本、袴田三氏らを中央委員会常任幹部としていただくことになって、椎野氏は一九五八年に除名され、野坂、志賀、宮本、袴田氏らの「日共指導層」により、第七回大会から第八回大会にいたる過程でさきの「新綱領」は排撃され、「平和革命」をうたった現「日共綱領」が決定

されたものである。このような、のちに展開される変転劇を念頭におくとき、宮本、椎野両氏の論文趣旨は、われわれの興味を大いにそそるものがあるのである。

宮本顕治氏論文『共産党・労働者党情報局の「論評」の積極的意義』（一九五〇・三・五）から。

「第十八回拡大中央委員会は、『コミンフォルム機関紙の論評に関する決議』で、共産党情報局の『日本の情勢について』の『積極的意義』をまとめ、『批判』が、『たとえ』として指摘した同志野坂の『理論』が、原則的にあやまりであることをみとめた。そして今後、国際プロレタリアートの期待にむくいることを誓った。この決議を、今後の闘争でみのり多いものとするために、われわれは、『日本の情勢について』の決議に関して、より徹底的に理解する必要がある。」

「同志野坂の『理論』は、『平和革命』を主張するばあい、ロシア革命の一九一七年四月―七月までの情勢が引き合いにだされている。しかし、この点、日本の一九四五年八月以後の情勢と基本的に相違していることをわれわれは知る必要がある。……レーニン……平和的發展の問題にふれているが、『歴史上きわめて稀な極めて価値ある可能性、例外的に稀な可能性』と規定している。

敗戦直後の日本の情勢は、このような『歴史上きわめて稀な事態』に属しているとはいえない。そこで、ロシア革命のばあいを歴史的に類推して、日本革命の『平和的發展の可能性』を提起することは根本的な誤りとなる。したがって、議会を通じての政権獲得の理論も同じ誤りであることは論をまたない。」

「国際政策上の中立主義は、マルクス・レーニン主義、プロレタリア国際主義の原則に反する。……今日において、二つの陣営のどちらかにも『かたよらず』にいうことで、党が、もっとも広汎な労働人民の支持をうると考えることは、ブルジョア民族主義的偏向におちいるものである。……「今日の世界において、中立とは欺瞞的なたわごとにすぎない」という、『新民主主義論』における同志毛沢東の指摘は、中国だけに限定されるものではない。……たとえば、千島の一部帰属が、ヤルタ協定による理由も、プロレタリア国際主義の把握がなければ、正しく理解されがたい。」

「日本の情勢について」および『日本人民解放の道』は、わが人民、わが党の進路に明確な光りを投げた。……われわれは、これまでの党の革命的伝統と成果の一切を發展させつつ、国際プロレタリアートの指摘した弱点を、ためらうことなく、理論的・実践的に克服し、日本人民の面している重大な歴史的課題を、勝利的にたたかいぬかねばならぬ」（傍点―山本）。

椎野悦郎氏論文『日本共産党の歩んだ道』（一九五〇年・三月―四月）から。

「コミンフォルムが『日本の情勢について』論評をおこなって以来、終戦後の党の諸方針と活動を検討することが行われつつある(?)。ところが、一部の同志(!!)は、党の第四回および第五回大会で連合軍を解放軍と評価したことは誤りであると述べている。だが(?)、これらの同志は、いかなる情勢のもとしていかに問題が立てられたかを正しく分析しない(!!)で現在の情勢と任務の立場から当時の条件を規定している(?)のである。このような方法からは正しい結論を生みださない(?)のみでなく、誤った方向へ(!!)党を導くものである。」

「この連合国反ファシズム戦線の一致した政策によって、日本の軍事的封建的諸要素を除くことは、単に日本の人民大衆にとって必要であるだけでなく、長い間、日本軍国主義の支配下にあった朝鮮、中国および全アジア諸国の解放のためにも、また世界の平和維持のためにも(?)、極めて重要な前提条件をなすものである。したがって(?)、日本共産党がこの諸政策を支持し(!!)、占領軍を解放軍として(!!)迎えることは当然のことといわなければならない(?)。この方針は、終戦後最初の党の声明である『人民に訴う』から一九四六年二月二十四日の第五回大会まで一貫した立場である(?)。」

「それにもかかわらず一部の同志が明白な非マルクス・レーニン主義的立場から、この問題をとりあげた原因はどこにあるか。それは第一に、革命に対してブチブチ的に(?)確信のないことであり、第二に、コミンフォルムの批判と党の決定に対する理解の不十分である。特に同志野坂がどこで、何を誤ったかを正當に(?)理解していない点にある。」

「この機会に、私自身の立場を明らかにしたい。私は革命が平和的に遂行されうとは思わなかった(?)。しかしながら、同志野坂の理論は、現在の段階では、党が大衆と結合する(?)ために非常に役立つもの(?)であり、その限りにおいて(?)これを宣言し、宣伝の武器として(!!)運用しなければならぬと考えていた。とくに(?)選挙闘争にはかかる立場からの宣伝をおこなった。一言にしていえば、私は同志野坂の意見は党にとってプラスになるもの(?)だと理解したのである。しかし、コミンフォルムはこれを大きなマイナスと評価した(?)。この見解は正しい(?)。正にその通りである(?)。私はこの点を(?)自己批判する(傍点および(?)、(?)——山本)。」

宮本、椎野両氏の論文を読みあわせると、後者の方が盲従的・俗物的修正主義者の心情をはるかに率直に表明していることがわかる。第一、「連合国軍隊は反ファシズム共同戦線のための軍隊であって当然に解放軍である」というスターリン・モロトフの戦争中の意見を忠実に守り、終戦直後のアメリカ進駐軍による民主的改革措置の「有難さ」を身をもって体験している「指導者」が、「占領軍を解放軍として迎えることは当然だ」と強調するのは、その本性からしても無理からぬことであって、

こうした盲従的経験主義者にとっては、その考えを覆えすものは「事実による反駁」以外にはなく、一九五〇年六月占領軍による「日共弾圧と朝鮮侵略戦争」という「手痛い経験」をまたなければならなかったのである。第二、野坂氏の反革命的・反人民の見解は野坂氏個人の論文にはけっしてかざられないで、終戦直後から第五回党大会まで、したがってまた「論評」が発表される直前の一九五〇年まで、日本共産党全体の一貫した立場であると、椎野氏は言明している。第三、「平和革命」は実現不可能であるが、大衆を党にひきつける「結合する」^{！！}ために必要な「宣伝の武器」として自分は認め、積極的につけたのだという椎野氏の発言は、「日共指導層」の一貫した「無理論と大衆引き回し主義」の立場をはっきり裏書きしている。「党にとってプラスかマイナスか」、つまり「日共指導層にとってプラスかマイナスか」ということを第一の決定的指針として万事を処理するという、この度しがたい俗物的煽動政治屋たち^{！！}そして、この期におよんでなおかつ、椎野氏は、「論評」と「社説」をば、理論的に正しいという理解の上に受け入れているのではなく、「野坂理論は党にとってマイナスだということが明らかとなった」から受け入れているのであり、そういう「プラス・マイナスの見地」に則することが「自己批判」だといっているのである。「日共指導層」に固有のこうした「プラス・マイナスの見地」を明示してくれているのは、まことに得がたい、貴重な記録といふべきである。

さて、以上で、和製「評論員」があげる「事実経過」の1と2の内容が、つまり、「戦後の初期に、日共指導部が『占領下の平和革命論』にもとづく右翼日和見主義の誤りをおかした」こと、この見苦しい「右翼日和見主義の誤り」は、「外国の諸党」の同志的批判と忠告によつて、はじめて、「日共指導部」の気づくところとなり、きわめて問題あるやり方の「誤謬克服」がおこなわれたということが、ほぼ明らかにされたとおもわれる。それゆえ、「外国の諸党」の「論評」と「社説」とは、「わが党の内部問題への介入」とか「大国主義的なおしつけ」とかいう言葉があてはまるところか、「日共指導層」にとっては、まさに「適切な批判、助言」（野坂氏『第七回党大会報告』）であり、「わが党の進路に明確な光りを投げた」（宮本氏前出論文）ものであったのである。一九五〇年以降の「分裂の時期」に「外国の諸党」が「日共指導層」に提出した意見としては、右の「論評」および「社説」のほかには、一九五〇年九月三日付「人民日報」

社説『今こそ日本人は團結して敵にあたるべきときである』と、一九五一年八月十日付コミンフォルムの論評「分派主義者にかんする決議」について『の二つしかないが、このあとの「社説」と「論評」は、「日共指導層」によって熱烈かつ献身的に受けいれられ、ことに「社説」は宮本氏以下の現「指導層」の歓呼して迎えたところであつて、この二つによつてはじめて「分裂の克服」への推進が軌道に乗ったものであることは、すぐあとで——野坂氏『第七回党大会報告』を検討するさいに——仔細に見られるとおりである。それゆゑ、和製「評論員」がいまごろになつて、「内部問題への介入」とか「大国主義的なおしつけ」とかいう事実無根の言辭を弄して、「日共指導層」の五年にわたる「分裂・抗争」の主な原因の一つにこれを仕立てあげようとしたり、また、「五一年新綱領」は「大国主義的なおしつけ」によつて「党の一定部分が採択した」もので極左日和見主義であるが、これを「克服」して「自主的に」つくりあげた現「日共綱領」は完全にマルクス・レーニン主義的なものであるという主張を「正当化」しようとしていることが、その品性にふさわしいまかつたくのまやかし、ペテンであることも、完全に明白となるのである。そこで、和製「評論員」が述べている「事実経過」の3以下の内容について、その「事実と真相」をとらえるべく、そしてとくに、「分裂・抗争」の「収束」の過程で九月「社説」と五一年「論評」がどういう意味をもったか、また「五一年新綱領」から現「日共綱領」への一八〇度転換を「日共指導層」がどのように「みごとになしとげた」かを突きとめるべく、なお若干の考察をこころみることにしよう。

(一九六九・一〇・一五)